

滋賀県立大学 研究シーズ集

Research Seeds 2020



滋賀県立大学
The University of Shiga Prefecture

滋賀県立大学研究シーズ集2020の発刊にあたり

平素は、本学の産官学連携事業に御理解と御協力をいただき、誠にありがとうございます。

公立大学は、地域における高等教育機会の提供と、地域社会での知的・文化的拠点としての中心的役割を担い、地域における社会・経済・文化への貢献が期待されています。本学は、研究成果や学術情報の公開を行うなど、地域文化の創造や産業の振興に寄与することを基本理念としています。

そこで、当センターは、受託・共同研究や奨励寄付金の受入、あるいは学術指導などを通じて、本学教員の研究シーズと地域社会のニーズとが繋がるよう、地域連携活動、産官学連携活動を積極的に推進しております。このたび、研究シーズ集をSDGsの視点に立ったよりわかりやすい内容に改め、「研究シーズ集2020」として取りまとめましたので、御活用ください。

なお、今後、当センターのホームページにも同一の内容を掲載する予定ですので、併せて御利用いただければ幸いに存じます。

2020年 10月

公立大学法人滋賀県立大学
産学連携センター長 山根 浩二

目次

〈研究シーズ〉

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ	
環境科学部	環境生態学科	教授	小泉 尚嗣	琵琶湖深部湖底湧水を探る	1
		教授	伴 修平	水草バイオマスの持続可能な収穫と利活用による湖沼生態系保全技術に関する研究	2
		准教授	後藤 直成	水圏生態系における物質循環	3
		講師	工藤 慎治	大気環境中の粒子状物質に関する研究	4
	環境政策・計画学科	教授	金谷 健	自治体廃棄物政策の立案支援	5
		教授	高橋 卓也	幸せのための森林との付き合い方を求めて／市場と環境を結びつける	6
		教授	香川 雄一	公害反対運動の経験から地域環境の保全活動へ 工業都市における環境運動と沿岸域の環境再生	7
		准教授	瀧 健太郎	持続可能な流域社会の実現に向けた政策研究	8
		講師	平岡 俊一	市民参加・協働型の持続可能な地域づくり推進のためのガバナンス構築に関する研究	9
	環境建築デザイン学科	教授	村上 修一	地域の将来像を描く／景観の新たな価値を創造する	10
		教授	高田 豊文	耐震補強用の木製面格子壁の性能評価	11
		准教授	ヒメネス ベルデホ ホアン ラモン	タクロバン市（フィリピン）での仮設住宅の再利用に関する研究	12
		講師	高屋 麻里子	歴史資産と現存しない建築と景観の活用	13
		講師	鄭 新源	快適な居住環境を実現するための環境心理学的研究	14
		講師	永井 拓生	ヨシを用いた構造デザイン・建築材料の開発	15
		生物資源管理学科	教授	杉浦 省三	魚類の栄養と飼料に関する研究
	教授		原田 英美子	地域植物資源の理解と有効利用に向けて	17
	准教授		岩間 憲治	農地と水利用	18
	准教授		高倉 耕一	生物間相互作用の視点から身近な生物相の成立要因を解き明かす	19
	講師		飯村 康夫	土壌から地球温暖化問題を考える	20
	講師		畑 直樹	環境制御や育種による高付加価値野菜の生産	21
	講師		中川 敏法	未利用資源の飼料利用と地域循環型畜産の確立	22
	講師		加藤 恵里	鳥獣被害対策と地域振興—今後の農山村のあり方—	23
工学部	材料科学科	教授	バラチャンドラン ジャヤデワン	機能的金属・合金ナノ材料合成技術開発・工学/医学応用	24
		教授 講師	松岡 純 山田 明寛	ガラスの融液物性・熱物性と破壊現象の研究	25
		教授	奥 健夫	次世代太陽電池・量子情報材料	26
		准教授	宮村 弘	新規機能的金属材料の探索と評価	27
		准教授	秋山 毅	光エネルギー利用の高効率化を目指した機能材料の開発	28
		講師	鈴木 厚志	次世代型太陽電池の材料設計と開発、第一原理計算によるNMR量子コンピューターの材料設計と物性予測	29
		講師	鈴木 一正	溶液プロセスを用いてナノ～メソ～マクロ構造を設計した有機-無機複合材料の作製とその物性制御	30
		教授	徳満 勝久	高分子複合材料の新規機能創成と高付加価値化の研究 (プラチック材料とゴム系材料の新規複合化技術)	31
		教授	金岡 鐘局	構造の明確な機能的星型ポリマーによる次元制御型環境調和材料の創製	32
		教授	北村 千寿	多環式芳香族炭化水素の合成と機能評価 ～光・電子・エネルギー材料～	33
		准教授	竹下 宏樹	多成分多相系高分子材料における構造形成機構	34
		准教授	谷本 智史	有機/無機複合コアシェル型微粒子材料の創製およびペプチド材料を用いた水中からの金イオン捕集	35
		准教授	加藤 真一郎	構造的・電子的に新奇な縮合多環共役化合物の開発：自己集合型エレクトロニクス材料の創製	36
		講師	竹原 宗範	生分解性の多機能的ポリマーの微生物による生産および環境負荷物質の微生物酵素による分解	37
		講師	伊田 翔平	精密ラジカル重合法を用いた新規高分子材料の創製	38

学部学科等		職名	氏名	タイトル	ページ
工学部	機械システム工学科	教授	安田 寿彦	移動と移乗を支援する福祉ロボット・システム	39
		教授 准教授	山根 浩二 河崎 澄	バイオマス資源のエンジン用燃料としての有効利用および高効率なクリーンエンジンシステムに関する研究	40
		教授	南川 久人	マイクロバブルやマイクロチューブ内流れなど環境やエコ技術に関連する混相流工学の研究	41
		教授	奥村 進	環境配慮型製品設計・メンテナンス・品質設計に関する研究	42
		教授	門脇 光輝	透過・屈折を伴う波動伝播に対する数学的散乱理論	43
		教授	呉 志强	数値解析と形状・構造最適設計	44
		教授 准教授	田邊 裕貴 和泉 遊以	「表面処理」と「非破壊検査」を柱とした材料強度研究	45
		准教授	山野 光裕	柔らかい素材を用いたロボットの開発と制御	46
		准教授	橋本 宣慶	バーチャルリアリティを利用した技能の解析と訓練	47
		准教授	安田 孝宏	流体機器の高効率化や流体騒音の低減に関する研究	48
		准教授 講師	大浦 靖典 田中 昂	振動問題の解決と振動を利用した機械の駆動や診断	49
		講師	西岡 靖貴	看護師・介護士・理学療法士を支援する生体計測とソフトメカニズム	50
	電子システム工学科	教授	柳澤 淳一	イオンビームプロセスを主とした超微細加工技術の新展開	51
		教授	岸根 桂路	応用システムとハードウェアの最適融合	52
		准教授	一宮 正義	半導体超薄膜作製とその超高速非線形光学応答	53
		准教授	土谷 亮	アナログCMOS集積回路の設計技術と応用技術の研究	54
		講師	井上 敏之	無線でつながる生体センシングシステムの研究開発	55
		教授	乾 義尚	リチウムイオン電池や燃料電池の解析	56
		教授	作田 健	磁気信号による微小欠陥・異物検出技術	57
		准教授	坂本 眞一	『熱音響』『モーター故障解析』『超音波エレクトロニクス』『エネルギー・環境』に関する研究・開発	58
		講師	平山 智士	電磁力を利用した大電力遮断技術の研究	59
		教授	酒井 道	機能性単位粒子の集合体・ネットワーク構造による高機能発現に関する研究	60
		教授	砂山 渡	データ分析支援環境の構築による知識創発支援	61
		准教授	宮城 茂幸	ICT技術を活用した人間行動の解析とその応用	62
		講師	榎本 光一郎	画像計測システムによる観測技術の確立	63
		ガラス工学研究センター	講師	出島 一仁	MEMSセンサを用いた温度・熱流束測定

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ	
人間文化学部	地域文化学科	教授	中井 均	戦国時代を考古学し、成果をまちづくりに活かす	65
		教授	塚本 礼二	「産地」の地理学的研究 ― 食べ物から伝統的工芸品まで ―	66
		准教授	横田 祥子	中国系女性移民と子供のディアスポリック空間の形成をめぐる研究	67
		准教授	櫻井 悟史	地域の飲食・観光・娯楽文化を問い直す	68
		講師	高木 純一	日本中世・近世移行期における村落の研究	69
	生活デザイン学科	教授	宮本 雅子	高齢社会における快適な居住環境に関する研究	70
		教授	森下 あおい	繊維製品の感性評価と適合度の高い衣服設計	71
		教授	藤木 庸介	地域に根ざした住環境計画・地域文化の観光活用	72
		准教授	横田 尚美	服飾文化史における「温故知新」のお手伝い	73
		准教授	山田 歩	マーケティング・消費者行動	74
		講師	佐々木 一泰	空間デザインと地域空間利用の研究	75
		講師	南 政宏	プロダクト・ブランディングデザイン	76
	生活栄養学科	教授 准教授 講師	矢野 仁康 遠藤 弘史 田中 大也	食品成分を用いた新規抗癌剤の開発に向けて…	77
		教授	中井 直也	骨格筋培養細胞モデルを利用した運動刺激および栄養刺激効果の解析と応用	78
		教授	辰巳 佐和子	新規肝リン利尿因子が繋ぐ多臓器連関制御と慢性腎臓病治療	79
		教授 准教授 講師	福渡 努 今井 絵理 畑山 翔	食品成分の新規機能と有効利用	80
		准教授	奥村 万寿美	栄養と食のマネジメント	81
		准教授	廣瀬 潤子	QOL向上を目指した栄養食事指導 ―母乳栄養の神秘に迫ります―	82
		准教授	佐野 光枝	妊娠中の母親の食事が胎児に与える影響 ～羊水成分分析から明らかにする胎児の栄養環境～	83
		准教授	東田 一彦	身体運動によるエネルギー代謝亢進機序に関する研究	84
		講師	桑原 頌治	リンの代謝調節機構の解明と健康	85
		人間関係学科	教授	上野 有理	子育てと子育て支援の科学
	教授		丸山 真央	自治体・地域コミュニティの課題を社会学的に診断する	87
	准教授		原 未来	ひきこもり等の状態にある若者への支援	88
	講師		後藤 崇志	人の主体的なふるまいに関する心理学研究	89
	国際コミュニケーション学科	教授	棚瀬 慈郎	チベットの社会と歴史	90
		教授	呉 凌非	日本語モダリティと中国語モダリティの対照研究	91
		教授	小熊 猛	認知言語学・語用論・言語類型論	92
		准教授	橋本 周子	「よく食べる」とはどのようなことか	93
		講師	中谷 博美	認知言語学・語用論の知見を英語授業に活用する研究	94
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹 君和	看護・介護者の腰痛予防教育システムの開発および地域住民の健康生活支援	95
		教授	安原 治	神経系における神経活性物質の局在に関する研究	96
		准教授	米田 照美	看護者の危険認知と医療安全教育 ～すべての人々に安全な医療・看護の提供を目指して～	97
		教授	岩谷 久美子	助産師教育の安全管理に関する研究	98
		教授	越山 雅文	超音波を使ったヒト下肢浮腫定量測定装置の開発	99
		准教授	荒川 千登世	続発性リンパ浮腫のセルフケア継続支援	100
		講師	岡崎 瑞生	健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み	101
		教授	甘佐 京子	小・中学生を対象にしたメンタルヘルス教育の検討（教職員・保護者も含む）	102
		教授 准教授	河野 益美 森本 安紀	特別養護老人ホームの公助・共助・自助・互助の力を結びつける仕組みづくり	103
		准教授	牧野 耕次	看護におけるインボルブメント	104
		講師	川口 恭子	ひきこもり状態にある人と家族への支援	105
		准教授	大脇 万起子	育児・療育支援のためのアプリケーションの開発 看護学と応用情報科学の融合	106

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
全学共通教育推進機構	教授	福井 雅英	教師の専門力量を問い直すー臨床教育学からの接近	107
	准教授	坂本 輝世	日本語母語話者の英語論文に見られる構成上の問題点：その可視化と教育的効果	108
地域共生センター	准教授	鵜飼 修	地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援 ～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～	109
	講師	上田 洋平	「あたりまえの暮らし」と「無事の文化」を守る まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成	110
地域ひと・モノ・未来情報研究センター	准教授	杉山 裕介	物理現象を記述する偏微分方程式の数学解析	111
<研究者別 研究分野・キーワード一覧>				113-116

戦国時代を考古学し、成果をまちづくりに活かす

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 教授 中井 均
研究分野：日本考古学

概要： 日本列島の中・近世の歴史を考古学から研究します。考古学は決して時代を限定したものではなく、歴史を研究するひとつの方法論です。研究室では「戦国時代を考古学する」をテーマに研究をおこなっています。特に研究の中心として城郭の調査、研究をおこなっています。城郭は地域で愛される遺跡であり、調査の成果を整備に活かし、広く市民に提供し、憩いの場の提供と、様々なイベントの場としてまちづくりに活用する事業などを企画、立案し、実施しています。

人間文化学部

■山城の調査・研究をまちづくりに活かす

日本列島には14世紀から17世紀に至る300年間の間に、約3～40,000におよぶ城館が築かれました。まさに日本の中世は大築城時代といっても過言ではありません。こうした山城には地域の特徴や戦国大名の特徴があり、それらを分析することによって地域の戦国時代を知る重要な資料となります。研究室では3年前より岐阜県可児市の国史跡金山城跡の発掘調査を夏休みに実施しています。また、各地の城跡の石垣調査なども受託事業として実施しています。今、日本は空前のお城ブームです。研究だけにとどまらず発掘された城跡の史跡整備の指導もおこなっています。また、城跡を起爆剤としてまちづくりに関わっています。



■中世陶磁器の研究

こうした戦国時代の山城や館、都市や村落からは、土器や陶磁器が大量に出土します。土器の産地を分析し、戦国時代の流通について研究しています。さらには中国や東南アジアから持ち運ばれた貿易陶磁も多く出土しており、それらを分析することによって、戦国時代の海外交易についても研究しています。



■近世大名墓所の研究と保存・活用

江戸時代の大名は中世の守護、戦国大名にはなかった墓の造営をおこないません。それは歴代の藩主が同じ墓所内に墓所を営むことです。守護、戦国大名は個人として墓を造営しており、歴代の墓所を造営することはありませんでした。これは江戸時代の大名が強い「イエ」意識を有していたからです。また、参勤交代制度により江戸と国許に墓を造営する大名家もあれば、国許にのみ墓所を造営する大名など様々な墓制が認められます。これらも大名の「イエ」による造墓意識と考えられます。こうした墓所のあり方を分析することによって、日本の「イエ」意識を研究しています。また、国史跡指定に向けて調査し、指定後は保存・活用計画を立て、地域の財(たから)として広く一般公開に努めています。



「産地」の地理学的研究 — 食べ物から伝統的工芸品まで —

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 教授 塚本 礼仁
研究分野：人文地理学

地域の産業が、それを取り巻く社会・経済的環境に対応し、どのような「しくみ」で存続しているのかを探っている。

■ナショナル・フードシステム研究

日本人がこれからもウナギを食べ続けるには…。

このことは、ニホンウナギが国際自然保護連合から絶滅危惧種に指定され、ワシントン条約の国際取引規制対象となる可能性も高まるなか、自然科学分野のみの研究課題ではない。ウナギ食文化を後世に残すためには、資源管理を徹底したうえで、その先にある「ウナギ産業」（養殖業・加工業・流通業・専門料理店業）の存続が不可欠である。目下、業界団体等と連携し、情報収集・分析に努めている。



ウナギ養殖場（静岡県浜松市）

■ローカル・フードシステム研究

琵琶湖の幸を食卓へ…。

滋賀県の淡水魚食文化は、閉鎖水域（琵琶湖）の漁業資源と限定された地場需要、そしてそれらをつなぐ地域産業（加工業・流通業）によって成り立っている。こうした地域的フードシステムについて、これまでに琵琶湖漁業の現状、漁獲物の流通や加工に携わる「湖魚業者」の実態、琵琶湖産魚介類の地産地消・広域販売網などを調査し、他地域（茨城県霞ヶ浦沿岸）との比較もおこなった。



ビワマス丼とコアユ佃煮（滋賀県長浜市）

■地場産業・伝統産業研究

作っても売れない時代を生き残るには…。

日本の地場産業産地は、例えば西陣織などの国指定伝統的工芸品でさえ、内需の不振という慢性的な課題を抱え、縮小再編を余儀なくされてきた。しかし水面下では、新技術の導入や新製品の開発、海外や産業観光といった新市場への展開といった動きも見られる。こうした地場産業産地の多様で複合的な「生き残り戦略」を調査によって観察・整理し、分析している。



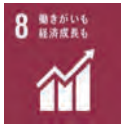
関刃物産地の刃物祭り（岐阜県関市）

<共同研究等>

構造再編下の水産加工業の現状と課題に関する調査（一般財団法人東京水産振興会、2009・2011年）

中国系女性移民と子どものディアスポリック空間の形成をめぐる研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 准教授 横田 祥子
研究分野 : 社会人類学、宗教人類学、地域研究

台湾、インドネシアを中心として、少子化、再生産労働の国際分業化にまつわる家族、結婚、女性の移動について研究しています。

■少子高齢化、再生産労働の国際分業化時代の家族と子ども

台湾、インドネシア、香港、マレーシアにて調査

人間の再生産や、性サービス・養育・介護に関わる労働を「再生産労働」といいます。近年、「再生産労働」は先進諸国と第三世界の間で分業されるようになってきています。先進国・それに準ずる地域では、国際結婚で配偶者を求めたり、家事・介護に従事する労働者を海外に求めています。

台湾の漢民族は、男子を生み祖先祭祀を継続することが、家族、親族、宗教、経済と結びつく重要な理念でした。しかし、女性の社会進出が顕著で、合計特殊出生率は極めて低くなっています。つまり、社会の根本であった文化的理念はもはや実行が難しくなっています。

少子高齢化や女性の社会進出と、再生産労働の国際分業化は連動しており、台湾でも積極的な対応が見られました。しかし少子化は依然進行中です。少子化に際して、文化はどんな対応をするのか、現地調査を行っています。



■インターエスニック状況の宗教人類学的研究

インドネシア西カリマンタン州にて調査

西カリマンタン州シンカワン市は、19世紀中国広東省から鉱山労働者としてやってきた人々を祖先に持つ中国系住民が多く住む都市です。そして、*Kota Seribu Kelenteng* (幾千もの中国寺廟のある町) という異名がつけられるほど、宗教施設が多く、民間信仰の盛んな地域です。

当地の信仰は、華人・ダヤック人・ムラユ人という三大エスニックグループの緊張関係を反映しており、錯綜しています。インターエスニックに形成されている信仰を通じて、当地の世界観・宗教観並びに民族間関係を歴史的に明らかにしようとしています。



■人の移動と住空間に関する文化人類学的研究

台湾、中国、インドネシアにて調査

国際結婚家族は、関係性の変化とともに住空間をどのように改変していくのか、また観光産業の発達に伴い、伝統的民家はどのように改変させられていくのかを研究しています。



<特許・共同研究等の状況>

科学研究費 (基盤研究A) 「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(2018-2021年) 研究分担者

科学研究費 (基盤研究C) 「人の観光にかかる意思決定構造のモデル化とローカル・リビング・ヘリテージの維持・保全」(2018-2021年) 研究分担者

科学研究費 (基盤研究C) 「社会関係を開閉する食実践と住に関する文化人類学的研究」(2018-2020年) 研究分担者

地域の飲食・観光・娯楽文化を問い直す

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 准教授 櫻井 悟史
研究分野 : 歴史社会学、文化社会学、犯罪社会学

概要：新型コロナウイルスの影響で、飲食・観光・娯楽文化が深刻な打撃を被りました。こうした現状をふまえ、それらの文化の過去・現在・未来を問い直し、持続可能な実践を支える基盤を整えることが求められていると考えています。

■飲食文化の問い直し

飲食業への新型コロナウイルスの影響は深刻です。営業が再開できたとしても、ソーシャルディスタンスの観点から、店内におけるコミュニケーションのあり方について再考せざるを得なくなりました。

私はこれまで、飲食と場所の関係について考えてきました。具体的には、右に挙げた『フードスタディーズ・ガイドブック』の中で、都市社会学者であるレイ・オルデンバーグの著書『サードプレイス』を取り上げ、「コミュニティの核になるとびきり居心地よい場所」とは何かについて検討しました。また、日本の戦後文化を研究しているマイク・モラスキーの『日本の居酒屋文化』を取り上げ、地元根付いた庶民的な、主として個人経営のこぢんまりした居酒屋＝〈赤提灯〉が、いかに地域の「サードプレイス」として重要かということについて検討しました。こうした研究を活かして、滋賀県の飲食文化と地域の居場所との関係について問い直したいと考えています。

■観光文化の問い直し

観光の根底にあるのは、人の移動です。新型コロナウイルスによる移動の制限は、この根底を揺るがすものでした。かつて、観光は「平和へのパスポート」と呼ばれました。戦争が起こっている地域には観光にいけず、文化の交流などもできないからです。これをふまえて、観光を「移動の自由へのパスポート」ととらえることからはじめ、それを持続可能なものとして構想することが重要であると考えています。

具体的な研究対象としては、新型コロナウイルス以前から、観光にあたって様々な社会的バリアに直面してきた障害者の方達の観光について、ユニバーサルツーリズムという観点から検討するつもりです。また、竹生島への観光等の検討を通じて、滋賀県における人の移動の歴史についても考えていくつもりです。

■娯楽文化の問い直し

深刻な痛手を被ったのは、娯楽文化も同じです。私はこれまでサントリー文化財団の助成を受けて、大阪のキャバレー文化について研究を進めてきましたが、今回の自粛要請で真っ先に槍玉にあげられたのがキャバレーでした。キャバレーはカフェの系譜に位置付けられる娯楽産業です。現在、キャバレーはほとんどなくなってしまいましたが（全てなくなったわけではありません）、キャバレーに備わっていた娯楽文化は、様々なところに見出せます。たとえば、クラブの踊り、カラオケの歌、スナックの社交などです。私は現在、キャバレーを軸として、日本の娯楽文化を捉え直す歴史を書くことができないかと模索しています。そうした作業は、これまでも日本文化の新たな側面に光を当てる研究として重要であったと考えますが、このような時代において、一層重要性が増したのではないかと思います。娯楽文化とは何かを根本から問い直し、そうした文化を擁護するための基盤を整えること。それがいま必要なのではないかと考えています。



安井大輔編『フードスタディーズ・ガイドブック』(2019年、ナカニシヤ出版)の表紙。私はこの本の中で、ノルベルト・エリアス、レイ・オルデンバーグ、マイク・モラスキーという三名の社会学者を紹介しました。

日本中世・近世移行期における村落の研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 地域文化学科 講師 高木 純一
研究分野 : 日本中世史、村落史

概要：江戸時代の社会にイメージされるような、日本の「ムラ社会」＝「伝統」社会の成立の出発点として、中世後期の「惣村」の形成が指摘されています。私はこれまで、とくに山城国上久世荘という荘園村落を事例として取り上げ、その実態解明を進めてきました。このことは私たちの現代社会のルーツを知るうえで重要な意味を持ちます。

■中世「村請」状況

近世には村による連帯責任制の年貢納入体制である「村請」制が成立しますが、じつはすでに中世の荘園制下において、その原型をなす「村請」的な状況が形成されていたことを明らかにしました。

■「荘家の一揆」

上久世荘の百姓たちは、毎年のように、年貢額や農業に必要な経費の負担をめぐって、領主である東寺と交渉を行っていました（「荘家の一揆」）。現代で言う「春闘」のような労使交渉に近いものです。こうした運動を通じて、荘園に替わって、「村」という存在が、社会的・政治的な単位として認められていくことになるのであり、荘園制から村町制へという社会体制の変革の前提となります。

■「鎮守の森」の研究

上久世荘の領域内には草刈場や里山がなかったため、彼らは国境を越え、丹波国まで出向いて山林資源を採取していました。彼らがわざわざ10km以上もの距離を往復しなければならなかったのは、当時の京都近郊地域の山林資源がすでに枯渇していたことを示しています。こうした厳しい資源状況を補うために、当荘の百姓たちは、村の鎮守を囲繞する森林＝「鎮守の森」において、資源採取を行っていたことを明らかにしました。このような「鎮守の森」のあり方は近世にも確認され、宗教的聖地として人の立ち入りや伐採を禁じる近代以降の「鎮守の森」とは大きく異なるものです。



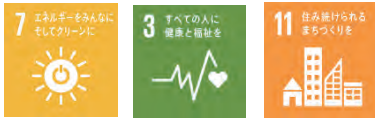
上久世荘のメインストリート。正面が鎮守蔵王堂



蔵王堂の「鎮守の森」の現況

高齢社会における快適な居住環境に関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科 教授 宮本 雅子

研究分野 : インテリア計画、色彩学、福祉住環境

研究室HP : <http://www.shc.usp.ac.jp/miyamoto/>

超高齢社会に突入した今日、住環境についてはまだまだ改善が必要な点がある。その中でも主に視環境に着目した研究を行っている。高齢者・若齢者ともに快適な居住空間の条件、生活スタイルや美意識にあった住宅照明について検討することにより空間計画への応用が期待される。また、視覚障がい者、高齢者、車椅子利用者等が安全に駅を利用するための情報について検討を行っている。

■夜間の住宅照明環境の実態と生活スタイル・省エネルギー意識

現在、住宅照明として多灯分散照明が推奨されているが、日本人の生活スタイルにそぐわない可能性がある。また、省エネルギー意識の高まりからLED照明の普及、有機EL照明の開発など住宅照明用光源に関する変化がめざましい。そこで、住宅照明の実態、居住者の省エネルギー意識等の調査を行い、日本人の生活スタイルにあった住宅照明について検討している。

LED照明は光の広がり方や人の生体リズムへの影響などが問題としてあげられているが、実際の住宅でLED照明の使用モニター実験を行い、空間の雰囲気や睡眠状態、唾液アミラーゼ活性などを捉え、現在の照明条件との違いを比較した。実際の生活の場でのデータが得られることから、実験室実験では得られない貴重なデータとなると考えている。

また、中国、韓国の研究者と協力し、日本で行っている調査と同様の調査を行い、東アジア(日本、中国、韓国)の風土、文化にあった照明環境の提案をすることを目的とした共同研究も行った。さらに、生活スタイルの異なる欧米の照明環境との比較研究を行った。

■美意識に対応した住宅照明についての基礎的な研究

日本の住宅居間は1空間1灯が、大半であることがわかっており、1灯で様々な行為が行われているため、くつろぎ時であっても明るさは変わらない。また、拡散光による照明が主に使われており、空間に陰影がなく平坦なイメージになっている。

近代以前の照明は、火を使った局部的な照明が主に使われ、陰影のある空間が見られたが、より明るい照明が求められた。十分な明るさが得られるようになった現代でもより明るさが求められることがある。しかし、現代のような明るさが本当に快適なのかは疑問である。そこで、住宅で美しく快適な暗さをテーマとして、研究を進めている。



■安全に駅を利用するための情報についての研究

駅構内を安全に移動するための情報の事例についてインターネット、視覚障がい者へのヒアリング等によって調査を行った結果、大阪市、京都市などの都市部の地下鉄では、乗降位置案内が図で示されていることがわかった。これらはいずれも電車の車両数が同じで車両の止まる位置が決まっているため単純な図で表現が可能になっている。乗車駅での乗車位置がわかれば、降車駅での降車位置がわかり、乗り換えに便利な階段や大きな荷物を持っている場合や車椅子等の場合ではエレベーターの位置を確認することができる。JR線のように車両数が異なり駅によって停車位置が異なる場合には、十分な検討が必要になる。

そこで、琵琶湖線各駅(京都駅から米原駅)の必要な情報についての検討を行った。それをもとに、視覚障がい者のための音声情報を作成した。

繊維製品の感性評価と適合度の高い衣服設計

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科 教授 森下 あおい
 研究分野：服飾デザイン、被服構成学
 研究室HP：<http://morishita-lab.jp/>

概要：感性価値のある繊維の特性を活かして、新しい用途や快適性を向上させる服飾デザインの開発に取り組んでいます。これからの生活では個人の要望に沿うものを無駄なく作り、提供することが求められますが、急がれるのは体形や動作に合うファッションと開発です。人体計測をはじめとしたデータ分析と、体形と生活を取り巻く様々な設計要素から生活実態や労働実態に即した衣服を開発し、社会のwell-beingを実現したいと考えています。

■感性評価による製品開発

デザインの新しい意味やアイデアの創出には、消費者のニーズと素材の持つ特徴を、多角度から把握することが重要です。繊維の物性と人の感性の両面から、製品の特性を引き出すデザインを付加価値を表出させながら製品設計を行います。

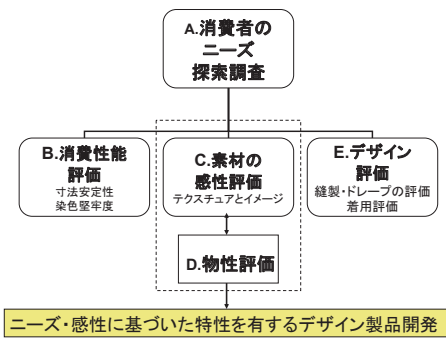
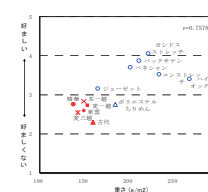
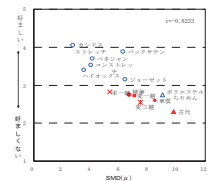


図1 調査から評価・分析への流れ



事例1 和装生地の風合い(しぼ)を活かしたデザイン開発



■3次元体形データによる適合度の高い衣服設計

外観と着心地の良さを備えた衣服には、着用者の体形特徴に合う設計を行うことが必要です。本研究室では、3次元人体計測データ解析から年齢や体形特徴に応じたデザインとその方法論、衣服パターンの展開について研究しています。特に座位姿勢による着崩れや圧迫などの課題を、動作分析から行い、立位、座位に関わらず、用途に合うファッション性を備えた衣服開発を進めています。

事例2 素材の風合い分析によるブラックフォーマルウェアの開発 (共同研究: 滋賀県東北部工業技術センター)



事例3 座位の姿勢にも美しく適合する「女性用背広上着」

＜特許・共同研究等の状況＞
 ・産業財産権（特許第6447994号）「女性用背広上衣」

地域に根ざした住環境計画・地域文化の観光活用

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科 教授 藤木 庸介

研究分野：建築計画、伝統的居住文化の維持・保全

研究室HP：<http://www.shc.usp.ac.jp/fujiki/>

人々の生活によって培われてきた地域に特有の居住文化は、その土地の気候風土や習俗習慣、あるいは地域産業といった様々な要素との結びつきにより形成されてきました。しかし近年、こうした地域に特有の居住文化は急速に失われつつあります。本研究室では特に、地域住民自らによる自律的な観光開発を手段とする事で行う、伝統的居住文化の維持・保全とその活用、並びに、地域に根ざした住環境計画について、研究・提案を行っています。

■ 名古屋市緑区有松における山田家住宅の実測調査と再生計画の提案

山田家住宅（図1）は、本研究室の実測調査から、寛政3年の建造を示す棟札（図2）を発見し、有松地区において現存する伝統的建造物の内、最も古い時期の建造である事を明らかにしました。また、当該民家小屋組の独自性に着目し、類似の小屋組が他に確認されない事を指摘しています。こうしたことから、当該民家の維持・保全と持続的利用を目的に、立命館大学平尾研究室、並びに向坊研究室らとの協働により、耐震性能評価を行った上で、その再生利用に対する計画提案（図3）を行いました。



図1：山田家住宅の現状

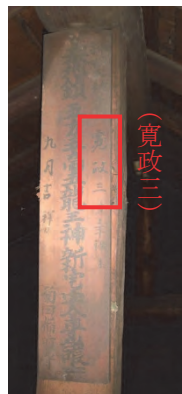


図2：棟札

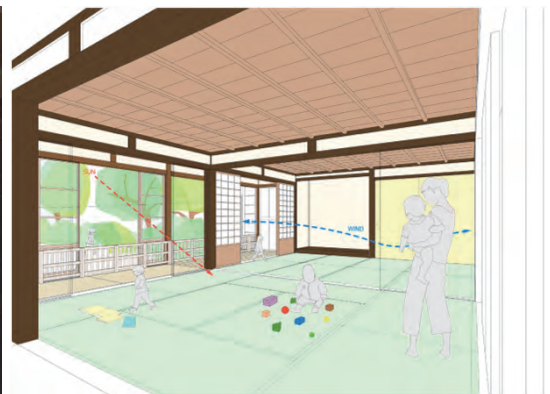


図3：再生計画

■ 地域の環境に寄り添う建築の設計

本研究室では、これまでに述べた地域における伝統的建造物や、これらを取りまく居住文化の維持・保全における研究の他、地域の気候や景観に寄り添う新たな建築の構築を目指し、各種建築に対する考察と、その設計・監理を行っています。

写真（左・中央）：ISビル（撮影：絹巻豊）

写真（右）：須磨の曲屋（撮影：絹巻豊）



■ 地域密着型工務店・住宅メーカー向け「住宅新商品」の開発

地域に根ざした住宅のあり方を考察し、地域密着型の新しい住宅商品開発・提案を行います。また、こうした住宅を提供する工務店・住宅メーカーへ向けたデザイン提案も行っています。

<共同研究等の状況>

ある老舗工務店より、住宅の新商品開発に関する研究を受託し、実施しました。具体的には、当該工務店がこれまでに販売した住宅を様々な角度から詳細に分析し、地域のマーケティングに対するアンケートやヒアリング調査も行った上で、こうしたデータを基に、新商品として特徴のある、且つ、ニーズとコストのバランスを考慮したパッケージ住宅の計画を作成し、当該工務店の総合的なブランディングを行いました。

服飾文化史による「温故知新」のお手伝い

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科

准教授 横田 尚美

研究分野 : 服飾文化史、西洋服装史、日本洋装史

ロンドンの人気ファッションデザイナー、ヴィヴィアン・ウェストウッドは、「過去において人間が何を成し遂げたかを理解し、それを今日のものと比較するよう努めるべきです。… そこから、未来がどんなものか少しずつ見えてくるかもしれません。」（「装苑」2004年4月号）と言っています。

服装史や日本民俗学の研究ノウハウが、オリジナルなファッションデザインや繊維産業界の活性、また地域の魅力の再発見のために貢献できることを願います。

■パリのファッションビジネスの歴史研究



1873年 通販カタログ

当時の百貨店のビジネスの工夫は、現在でもヒントになります。限定販売、ダブルネーム、プライベートブランドなど19世紀後半からの手法です。研究資料である当時の通販カタログは、デザインソースの宝庫でもあります。

■東京コレクションの取材と寄稿



2019年11月1日号

2018年10月より、年に2回、東京コレクションを取材し、「アパレル工業新聞」紙に、寄稿しています。

トレンドを探るのではなく、時代の変化を追っています。昨今は、どのブランドもSDGsを念頭に服づくりをしています。

■社会人の方々へのフィードバック

放送大学や滋賀大学教育学部の教員免許更新講習の講師として、衣生活の現状や問題点について、社会人の方々と考えて頂く機会を持っています。要望があれば、是非、様々な場で多くの方々と問題意識を共有させて頂きたいと考えています。

■滋賀県犬上郡多賀町衣生活資料の調査



「山行きボッコ

2018年秋に、大学のある彦根市に隣接する多賀町の山間のあるお宅から、沢山の衣料が見つかりました。これらは、海外で「BORO」と呼ばれ、高い評価を得ています。裏に継が当てられ何度も直された服、端切れや紐など、暮らしぶりかる貴重な資料です。学生とともに調査に取り組んでいます。

<特許・共同研究等の状況>

国際日本文化研究センター 「運動」としての大衆文化 共同研究員（2019年～）

マーケティング・消費者行動

関連するSDGsの国際目標



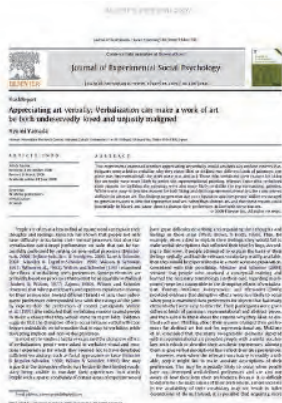
人間文化学部 生活デザイン学科 准教授 山田 歩

研究分野：消費者行動、行動デザイン、

マーケティングコミュニケーション、マーケティングリサーチ

消費者の行動傾向を分析することを通して、製品やサービスの価値を高める方法を考えていきます。製品・サービスの利用実態調査や消費者行動実験を行うことによって、既存の製品・サービスの問題の発見と改善、また、新しい製品・サービスの開発を行っています。

消費者行動の調査例



Yamada (2009; JESP)
“Appreciating art verbally: Verbalization can make a work of art be both undeservedly loved and unjustly maligned”

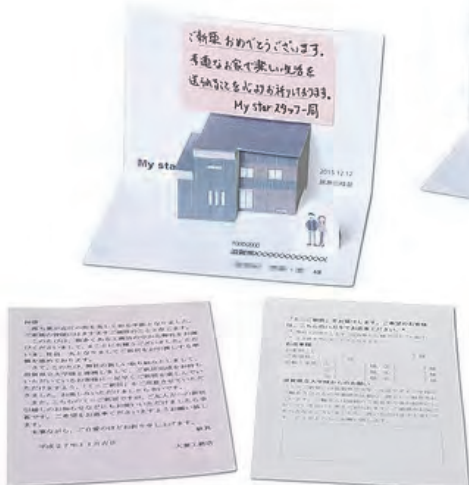


Yamada et al. (2014; FQAP)
“The effect of an analytical appreciation of colas on consumer beverage choice”



Yamada & Kim (2016; SSJJ)
“Option-splitting effects in poll regarding Japan's right to exercise collective self-defense”

プロダクト・サービスの開発例



「ミニ新居」
工務店と顧客をつなげるコミュニケーションツール
(第31回全日本DM大賞金賞グランプリ)



「ひふみ」
石州和紙のグリーティングカード（用途開発）
(第2回石州和紙デザインコンペグランプリ)

空間デザインと地域空間利用の研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科 講師 佐々木 一泰

研究分野：空間デザイン、コンセプトブランディング、
構法研究（近代建築）

研究室HP：[://www.shc.usp.ac.jp/ksasaki/](http://www.shc.usp.ac.jp/ksasaki/)

本研究室は実践的に空間デザインを開発し、コンセプトプロモーションから実施空間のデザインを行っています。また、地域空間の利用方法をワークショップなど実践的な手法を用いてデザイン開発を行っています。

■ 滋賀県立大学食堂中庭テラス （2009年グッドデザイン賞受賞作品）

大学構内の食堂にテラスを設け、中庭とつないだ計画。短工期、低予算、そして混雑の解消。バリアフリー。既存の空間に床という装置をつくることで、新しい利用方法を引き出している。



学生によるプロモーション。
ダンボール等再生可能な材料
による展示什器



シンプルな構成で問題解決する手法、学生との協働、県産材の利用、パーツのユニット化、などが評価された。



東京ビッグサイトグッドデザインエキスポでのプロモーション。
D-6. 社会領域：公共・文化教育
関連施設

■ 石山アートプロジェクト2009-2011

- dda賞入選（主催（財）ディスプレイデザイン協会）
- 第1回アーバンデザイン甲子園 準優勝
- 第2回アーバンデザイン甲子園審査員特別賞
（主催：日本建築学会近畿支部都市計画部会）
- DSAデザイン賞入選（主催：日本空間デザイン協会）

石山商店街をフィールドに、アーティスト、ハンディキャップの人、地域の人など、さまざまな領域の人とともに、活動を行ったアートプロジェクト。商店街の場所のさまざまな使い方を引き出す実験。



2009年、空き店舗を使ったワークショップにより制作した作品の展示。道行く人からも見える展示方法。



2010年、空き店舗を使った写真のワークショップ。地域に住む方々が多く参加している。



2011年、空き店舗を使った落語のワークショップ。空き店舗だけではなく、地域の余白空間で多くの活動を行った。

プロダクト・ブランディングデザイン

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活デザイン学科 講師 南 政宏

研究分野 : デザイン

研究室HP : <https://masahirominami.tumblr.com/>

概要：デザインの中で商品開発をサポートします。商品企画、プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、パッケージデザイン、ブランディングデザインなど。企業の技術や商品をどのように顧客へ伝えていくのかを研究テーマとしています。

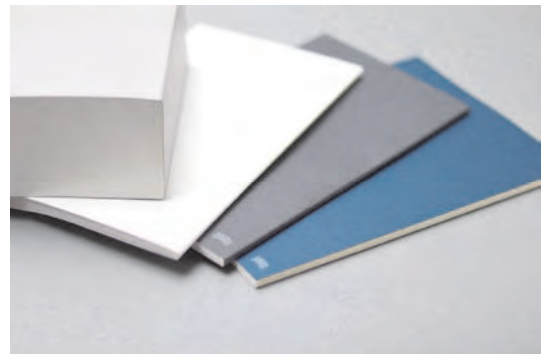
■造本主義

製本会社である、藤原製本株式会社の技術を用いて新しいノートブックの制作を行いました。無線綴じに用いる特殊な糊を可視化した「あらわ」。異なったサイズのノートを合わせることで二つのノートがくっついたような「かさね」。製作できる最大の厚みで作られた「ぶつちよ」。袋とじの技術を用いてポケット収納の「ぼつけ」。今までにない個性的なノートを開発。展示会のブースデザインから、リーフレットまでブランディング全般を行いました。



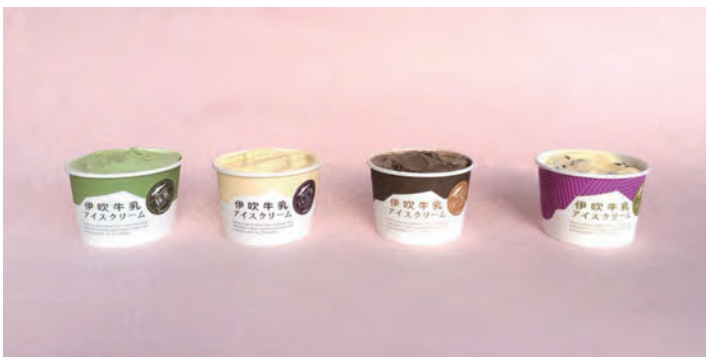
■彦根市ご当地ナンバープレート

彦根市オリジナルご当地ナンバープレートのデザイン。井伊家の赤備えをイメージさせるデザインとし、シンプルで飽きのこないものにしました。ネジには真鍮のものを使い、ひこにゃんのツノのようでありながら高級感ある仕上がりとしています。



■伊吹牛乳アイスクリーム

滋賀県伊吹山の麓にある伊吹牛乳のアイスクリームのパッケージリニューアル。高級感ある優れたパッケージとなり好評です。



<特許・共同研究等の状況>

- ・BIWACCA 釜焚き粉石鹼のパッケージデザイン
- ・NPO法人 あめんど 乾燥野菜のブランディングデザイン

食品成分を用いた新規抗癌剤の開発に向けて...

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科

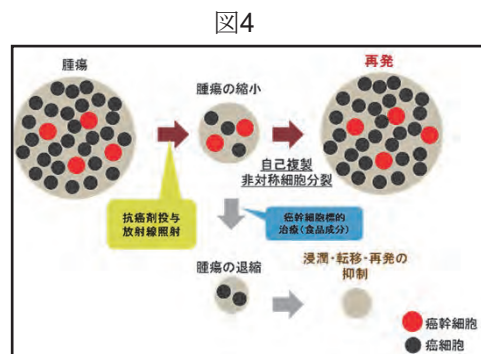
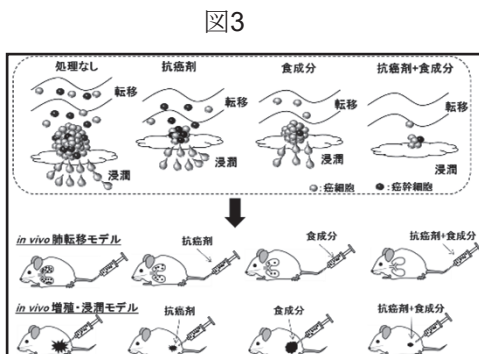
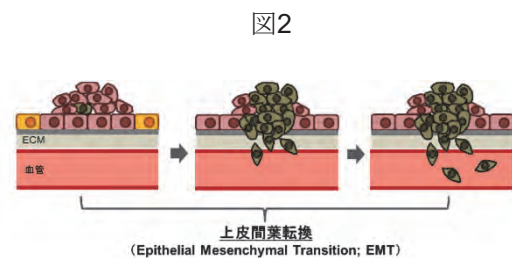
教授 矢野 仁康 准教授 遠藤 弘史 講師 田中 大也

研究分野 : 病態栄養学、分子細胞生物学

身近な食材が有する特性を明らかにすることで 癌を始めとする生活習慣病の予防など我々の健康増進に貢献できるような研究に取り組んでいます。本研究では、機能性食品として知られているポリフェノール類の細胞内ストレス蛋白質に与える影響に着目し、食品成分が有する抗癌作用などの生理活性についての詳細を明らかにすることで、食品が発揮する疾病予防効果を最大限に引き出すことを目指しています。

■ポリフェノール類に備わる新規癌細胞抑制機能

1990年代初めに、アメリカ国立がん研究所は、それまでの研究報告を基にデザイナーフーズ（図1）として癌予防効果があると考えられる食品を発表しました。これらの食品成分の抗癌活性は、抗酸化作用や、抗炎症作用によるものであることは明らかとなりましたが、それだけでは説明のつかない効果も多く存在します。一方、細胞の癌化に伴うストレス蛋白質の細胞内での発現増強は、これら分子が有する細胞死抑制機能や細胞周期の制御異常と深く関わっていることが分かっています。当研究室では、ポリフェノール類に備わるストレス蛋白質に対する発現および機能調節作用と癌細胞増殖抑制効果の関連性を明らかにしてきました。一方、近年癌の悪性化に癌幹細胞と上皮間葉転換(EMT)を起こした細胞（図2）がかかわっていることが注目されています。これらの細胞は癌の再発や転移の原因であると考えられており、それに加えて、標準的な癌治療である抗癌剤や放射線に対して抵抗性を獲得していることも知られています。現在までにこれらの細胞に対する抗癌剤は実用化されていませんが、当研究室では、ポリフェノール類がストレスタンパク質の発現を抑えることでこれらの細胞に対しても抑制効果を発揮することを見出しています。これらの事から我々は食品成分が有する様々な抗癌活性を癌細胞や実験動物を用いて検証（図3）し、新たな機序の抗癌剤の開発を目指して研究を行っています（図4）。



骨格筋培養細胞モデルを利用した運動刺激および栄養刺激効果の解析と応用

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科 教授 中井 直也

研究分野：運動生化学、スポーツ栄養学

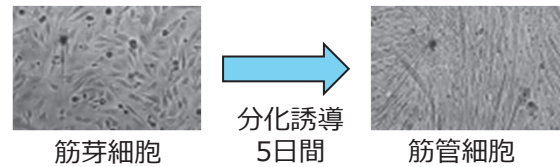
研究室HP：<https://naoyanakai.wixsite.com/ex-nutrition>

骨格筋培養細胞を電気刺激で収縮させることによって、運動時に骨格筋で起こる細胞内の変化を解析する。また、栄養素を培養液に添加したり、取り除いたりすることによって運動と栄養の効果を検証することが可能なモデルを確立し、有用な栄養素の探索・開発に応用することを目指している。

■骨格筋培養細胞モデルの確立

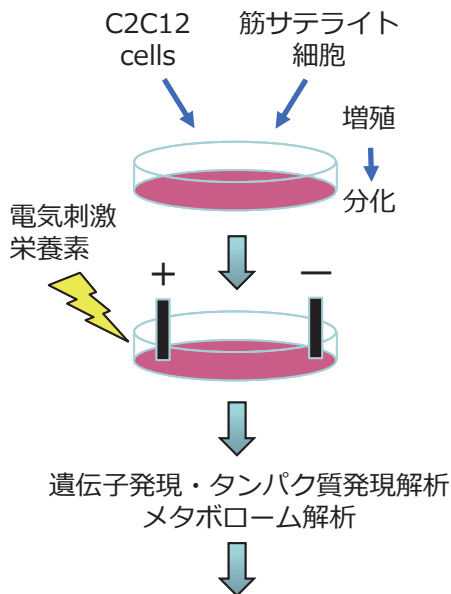
運動や栄養効果を細胞レベルで詳しく調べるためには、培養細胞を利用することは非常に強力なツールとなります。培養骨格筋細胞は増殖時は他の多くの細胞と同じく単核細胞ですが、細胞分化を誘導する培養液中では細胞同士の融合が起こり、多核の筋管細胞となります。また、アクチンやミオシン等の収縮タンパク質が発現し、筋収縮単位であるサルコメア構造が形成されます。

本研究室では、骨格筋培養細胞に身体運動時の筋収縮を模した刺激を加えることによって、運動時に起こる細胞内変化を明らかにしようとしています。



■筋収縮運動負荷モデル

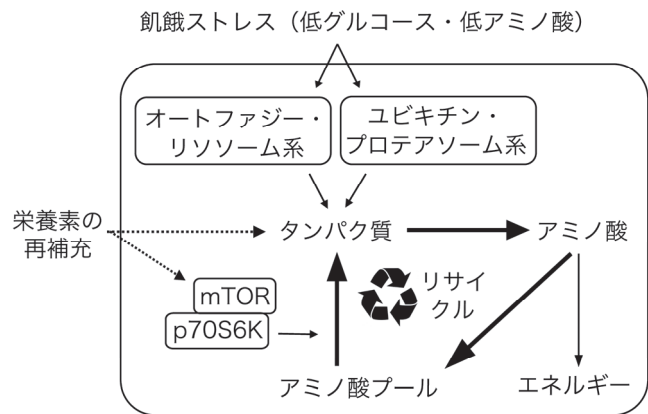
十分に分化誘導を行った筋管細胞に電気刺激を加えると収縮が起こります。現在、電気刺激の強度や頻度、時間を変えることによって、有酸素運動およびレジスタンス運動を模した収縮を負荷する方法の確立を目指しています。



運動効果をもよほす栄養素の探索・開発
健康をもよほす機能性食品の探索・開発

■栄養素飢餓と再補充モデル

骨格筋量の維持・増進のためには、タンパク質合成を高める必要があります。しかし、同時にタンパク質分解は不要なタンパク質の処理やアミノ酸のリサイクルに重要です。我々は、一定時間の栄養素（グルコースやアミノ酸）の飢餓後、栄養素を再補充するとタンパク質合成促進作用の指標となるmTOR/p70S6K経路を強く活性化することを見出しました。このメカニズムを明らかにすることにより、適切な絶食が骨格筋の量や機能を高める可能性を提唱しようとしています。



飢餓ストレス効果によるタンパク質合成の活性化

新規肝リン利尿因子が繋ぐ多臓器連関制御と慢性腎臓病治療

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科 教授 辰巳 佐和子

研究分野 : 臨床栄養学、腎臓内科学、骨代謝学

<https://statsumilab.weebly.com>

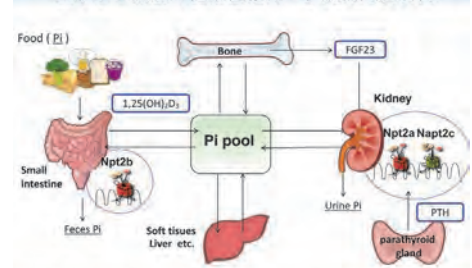
人間文化学部

臨床栄養学は、病態栄養解明とそれを基盤とした栄養管理の理解にある。我々の研究室では栄養代謝学的に問題のある疾病の発症機序の解明研究と、その成果に基づいた栄養管理法の開発を行なっています。特に国民病のひとつである、慢性腎臓病におけるミネラル代謝異常発症機序解明と進展予防、治療につながる栄養管理法の開発を目指しています。

■多臓器にわたるリン代謝の機序解明

無機リン酸イオン（以下リン）は ATP、核酸合成、細胞膜や骨格形成に必須のイオンである。生体におけるリン代謝は、腸管、骨吸収と骨形成、腎臓などが様々な調節因子にตอบสนองし、厳密な制御が行われている。腎近位尿細管におけるリン再吸収機構は、血中リン濃度を調節する中心的な役割を有している。加齢や腎臓病などで機能低下が生じると、リン代謝異常が惹起され骨疾患、心臓病、腎不全や寿命短縮などを引き起こす為、その破綻は生体に重大な問題となる。しかしながら、リン代謝の調節系は未だ不明な点も多い。我々は既存のリン代謝調節系に加えて、最近肝臓を中心とした、新しい代謝系 (Namp1/NAD経路) を見出した。この経路は慢性腎臓病進展予防、寿命制御、エネルギー代謝にも積極的に関与しているため、重要な経路であり、さらにその詳細な機序解明のため、多くの遺伝子組み換え動物を利用し解析を行なっている。

血中リン濃度の恒常性維持—多臓器連関制御

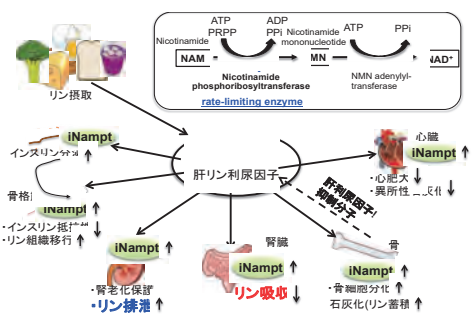


骨（骨形成、骨吸収）、腸管（吸収）、腎臓（排泄、再吸収）組織移行および分泌を介し、血中リン濃度の恒常性が維持される

■慢性腎臓病進展予防につながる肝リン利尿因子の探索

慢性腎臓病 (CKD) の予後悪化因子である高リン血症は、早期からの全身性リン代謝異常により生じるとされるが、詳細は不明である。我々の研究で得られた新規概念である『肝リン利尿因子が繋ぐ多臓器連関制御』の解明は重要であると考えられる。肝臓切除後 NAD⁺合成律速酵素であるNamp1が腎臓リン排泄に関与することを初めて提示した (J Am Soc Nephrol. 2014)。肝利尿因子とNamp1を介した新しいリン代謝系は、1) 各組織へのリン移行調節を担う 2) リン代謝の日内リズム形成の中心であることを証明する。本研究はCKDの早期リン代謝異常の改善による異所性石灰化予防、リン管理（食事時間、食事法）腎保護の基盤研究になり、肝利尿因子をターゲットとした先制治療法の構築に貢献することになる。

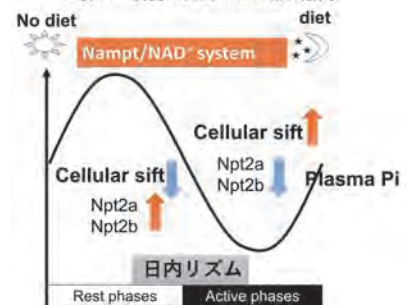
想定される肝リン利尿因子の役割



■リン代謝の日内リズムを考慮した慢性腎臓病治療法

血中リン濃度には、顕著な日内リズムが存在し、高リン血症の是正には、その形成機序の理解が重要である。特に、維持透析患者の死亡リスクは、早朝空腹時のリン濃度が規定するとされている。齧歯類やヒト研究から、その日内リズムは、食事に起因した腸管吸収と腎臓排泄、骨や軟組織への移行により複雑に制御されるが、形成機序は不明である。最近我々はリン代謝の日内リズムとその形成機序に、肝リン利尿因子とNamp1/NAD経路の関与を見出した (Kidney int. 2018)。これらの成果をより、肝リン利尿因子の分泌促進を促す食品の探索と、慢性腎臓病進展予防の食管理方法を開発中である。

血漿リン濃度の日内リズム形成機序



共同研究：これらの研究内容に関して、他大学との共同研究を実施している。

食品成分の新規機能と有効利用

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科

教授 福渡 努 准教授 今井 絵理 講師 畑山 翔

研究分野：栄養生理学、食品機能学、栄養疫学

http://www.shc.usp.ac.jp/fukkie/

食素材、食品成分、栄養素など食品と生体との関係を明らかにする研究を通じて、栄養学の理論・実践に寄与することを目指しています。本研究室の成果により、健康の維持増進に寄与する食環境の提言、新規機能性食品の開発、国民のQOLの向上、栄養学研究の発展が期待されます。

■アミノ酸代謝調節による脳機能の保護

最近の研究により、食習慣が脳機能に影響をおよぼすことが明らかとなってきました。そこで、アミノ酸を摂取したりアミノ酸代謝経路を制御・調節することによって、適度な範囲内で神経伝達物質を調節できる食環境を提言し、脳機能を保護することを目指しています。

■食品成分によるエネルギー代謝調節

体を温めるとされる食品の摂取後に、体の各部の体温変化、血流量、自律神経活動などを経時的にモニタリングすることによって、エネルギー代謝に影響をおよぼす食品成分の検索とそのメカニズムの解明を行っています。さらに分子レベルでの詳細な体温調節メカニズムを明らかにするために、遺伝子改変動物を用いた研究にも取り組んでいます。

■食品中の栄養素の生体有効性の評価

ビタミンの存在形態の違いによって、食品ごとに生体が利用できるビタミン量が異なります。本研究室では、食品摂取後に各ビタミン栄養状態を反映する生体指標を網羅的に測定することにより、食品を評価する研究に取り組んでいます。

■日本人を対象とした横断的、縦断的栄養疫学研究

どのような食事が健康維持や生活習慣病の発症予防にはよいのか、について明らかにすることを目的とした栄養疫学研究を行っています。国民健康・栄養調査や地域在住の中高齢者を対象とした大規模コホートのデータを用いて、高齢者の健康維持、生活習慣病発症予防に寄与する栄養素、食事パターンの解明に取り組んでいます。



栄養と食のマネジメント



人間文化学部 生活栄養学科 准教授 奥村 万寿美
 研究分野：臨床栄養，食育，フードマネージメント

概要：生活習慣病は、バランスのとれた食生活，適度な運動，禁煙を実践すれば予防することができます。しかし，自覚症状がなく静かに進行することから，予防に真剣に取り組んでいる人が少ないのが現状です。その結果として国民医療費の占める割合は年々増加しており，国家財政を締め付けています。生活習慣病の予防・治療における食事療法の重要性は理解していても，「わかっているけど，やめられない」と行動変容が達成できない人々が数多く存在します。医療機関等と連携して生活習慣の是正を阻害している因子を明らかにするとともに，患者様の療養行動を望ましい方向へ導くための，新たな栄養食事指導法の確立を目指しています。

■生活習慣病と行動経済学

人の感情や嗜好は、状況によって左右され、人は時に合理的な判断を下せない生き物です。例えば、食事療法や運動療法を続けていくと、体重は減少し、「健康」を手に入れることができます。しかし、大好きな甘いものや美味しい料理が好きなら食べられず、悲しくなります。今日ぐらいはいいや、明日から始めよう・・・このように、将来の報酬よりも、すぐに手に入る目先の報酬を選んでしまいがちです。行動経済学はこのような人間の非合理的な行動に一定の法則を見出し、癖や傾向を明らかにする学問です。この利益と不利益について分析することで、実際の健康行動が生じるような援助ができると考えられており、栄養食事指導への応用が期待されています。

肥満や糖尿病などの患者様を対象に、行動経済学の指標を用いて、療養行動を望ましい方向へ導くための方法を、医療機関等と連携して行っています。

■農家レストランの地産地消メニューの開発

滋賀の農家レストランの想い『自然豊かなこの地の恵に感謝して、癒される「食の拠点」づくり』に協賛し、生活栄養学科の学生が考案した地産地消のレシピを、レストランで提供されるメニューの一品として、コラボさせていただいています。

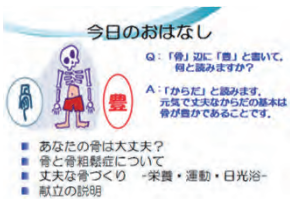


■介護予防のための料理教室の開催

超高齢化社会が進む中、高齢者が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けるとともに、人生の最後まで口から食べることを目的に、「栄養と食」をテーマに食事づくりを通して、生活習慣の予防や健康に関心を深められ、参加者同士の交流を育む場を提供しています。

■保育園における児と親に対する食育活動

近年、栄養の偏り、不規則な食事、伝統的な食文化の危機、変化ししています。特に、嗜好や食習慣などの形成が行われる幼児期からの、正しい食事の摂り方や食習慣の定着を図ることがとても大切です。健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、保育園・歯科と連携し「食育」活動を行っています。



QOL向上を目指した栄養食事指導 — 母乳栄養の神秘に迫ります —

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科 准教授 廣瀬 潤子

研究分野：食品免疫学、栄養教育論、小児栄養

生活スタイルの多様化を受け、食生活で見られる問題もさまざまです。それぞれのライフステージやライフスタイルにあわせた食生活の提案が求められています。

特に妊娠授乳期の栄養状態は、その後の児の生活習慣病の発症リスクとの関連が報告されておりとても重要な時期になります。また一方で、母親は育児という新しい生活パターンになることでストレスや不安も多くなる時期でもあります。

食事調査・アクチウォッチによる行動・睡眠状態調査・育児ストレス状況・体組成調査・母乳成分解析など、母乳栄養法を多面的に評価し、育児ストレスが少ない食環境の提案を目指しています。

■ ライフステージ・ライフスタイルに合った食生活

乳児、授乳婦の栄養素摂取量と栄養状態との関係を分析することにより、ライフステージにおける栄養素の適正な必要量を、また、育児環境の多様化にあわせた授乳方法や食事提案に向けて、ライフスタイルと食行動およびストレスの関係を解析しています。



■ アクチウォッチを用いた行動・睡眠調査 ～授乳期母子の夜間授乳が 睡眠に及ぼす影響～

夜間授乳は母親にとって大きな負担となる一方で、全哺乳量の10～15%を哺乳しているという報告もあり、是非については賛否両論あるが現状です。

下図のアクチウォッチを用いた母子の行動・睡眠状態の調査と、授乳行動の関連性を解析しています。そこで得られた機器分析による客観的睡眠指標と母親の育児ストレスアンケートの

結果をもとに、より育児負担感の少ない授乳行動の提案を目指しています。

また、授乳期のライフスタイルがその後の母子の食行動に与える影響を解析し、個人個人にあった食生活の提案を目標としています。



■ 母親の食事が母乳成分と児の成長に与える影響

この世界でヒトに食べられるためにだけ存在する唯一の食品、「母乳」の神秘に迫ります！

乳児期栄養は、後の生活習慣病との関わりや味覚・臭覚の発達に影響を与えるという報告されています。しかしながら、母親の食事内容と母乳中の成分、とくに味覚や臭覚に影響を与える成分に関する調査は極めて少ない状況です。また、不幸にも母乳を飲んで食物アレルギーを発症する場合があります。

乳児の成長や嗜好性、アレルギーの発症に影響を与える因子を、母親の食事内容という観点から解明し、お母さまが安心して哺乳育児が行えるように科学的根拠を提供します。

妊娠中の母親の食事が胎児に与える影響 ～羊水成分分析から明らかにする胎児の栄養環境～



人間文化学部 生活栄養学科 准教授 佐野 光枝
 研究分野 : 食品栄養学、分子栄養学、栄養生理学、代謝栄養学
 研究室HP : <http://www.shc.usp.ac.jp/sano/>

妊娠中の母親が摂取した栄養素は、胎盤を通過して胎児へ送られる。生まれる前の胎児の栄養状態の良し悪しは、近年の研究によって生後の生活習慣病等の疾患のリスクとなることが知られているが、母親の栄養状態と外見的な胎児の発育具合から間接的に評価されているのが現状である。そこで我々は、妊娠中のヒト、ラット、ウシを対象に、母体の栄養摂取状況の違いが胎児に与える影響について、食事調査に加えて血液や羊水などの生体試料中の栄養素関連成分濃度や胎児のエピゲノムの変化を調べる手法で研究を進めている。

■羊水分析：妊婦～胎児間の栄養素の胎盤輸送とエピゲノム解析

妊娠母体の栄養素摂取状況が羊水成分に与える影響について、ヒトやラットを用いて研究をしている。羊水は成長する胎児の分泌物から作られており、グルコースやアミノ酸等多くの栄養素を含んでいる。そこで我々は、胎児の栄養環境を調べるためのサンプルとして羊水中に着目し、その中に含まれる栄養素に由来する成分を分析している。また同時にエネルギー代謝関連酵素の遺伝子に着目し、胎児のエピゲノム変化の有無を調べることで生後の生活習慣病や肥満のリスクについて原因を明らかにすることを目的としている。

- (分析項目)
- ・グルコース、ケトン体
 - ・アミノ酸類
 - ・水溶性ビタミン 等

◇ヒトを対象とした研究

実験手法：食事調査
 分析 (バイオアッセイ法、HPLC法、比色法等)

- (分析サンプル)
- ・血液 (母親の血液、臍帯静脈血、ラットの胎児血)
 - ・羊水
 - ・ラット肝臓

◇ラットを用いた研究

実験手法：分析 (バイオアッセイ法、HPLC法、比色法等)
DNAのメチル化解析
 (バイサルファイトシーケンス法)

■羊水アミノ酸分析から明らかにする妊婦の生体利用率を考慮した摂取すべき食品の検討

胎児の生涯の健康を支援するために、妊婦の生体利用率を考慮した摂取すべき「食品の量や組み合わせ」の基準を導くことを目的とした研究である。そのために、羊水中に含まれる遊離アミノ酸濃度を測定することで胎児のアミノ酸の過不足をモニターし、妊婦の食事調査結果と胎児の出生体重を併せて統計解析を行っている。



身体運動によるエネルギー代謝亢進機序に関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科 准教授 東田 一彦
研究分野 : 運動生理・生化学、スポーツ栄養学

習慣的な身体運動を行うことで骨格筋では様々な適応が引き起こされます。例えば、重い負荷をかけてトレーニングを行えば筋肥大が起き、持久的なトレーニングを行うと筋持久力が向上します。その際に骨格筋細胞内で起きている適応を明らかにするための研究を、培養細胞、単離骨格筋組織や実験動物を用いて研究を行っています。

■身体運動が骨格筋の糖・脂質・タンパク質代謝を亢進する分子機序に関する研究

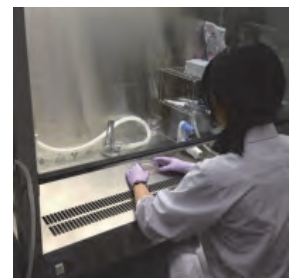
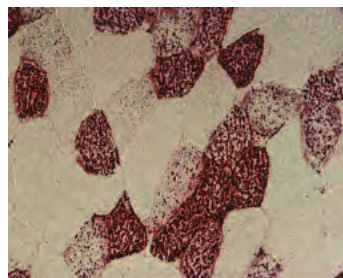
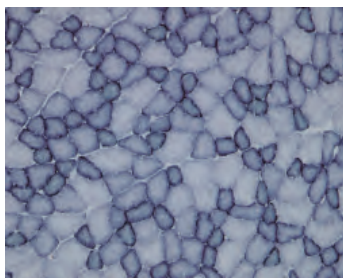
身体運動を行うと、骨格筋細胞内ではグリコーゲンの分解、脂肪分解・酸化やタンパク質分解の亢進が起こります。これら反応の分子機序の解明や運動トレーニングと栄養摂取による適応反応を培養骨格筋細胞、単離骨格筋や実験動物を用いて研究を行っています。



実験動物の単離骨格筋 (Epitrochlearis muscle)。
単離後培養液中で24時間以上培養が可能。Ex vivoでの筋収縮や化合物のスクリーニングなどを行うことができる。

■機能性油脂が骨格筋の糖・脂質・タンパク質代謝に及ぼす影響に関する

近年、特定の作用を有する脂肪、機能性油脂が注目されています。一般的に、食事から摂取する脂肪は肥満を招く元凶として考えられています。しかし、脂肪の中にも内臓脂肪の蓄積を防ぎ、メタボリックシンドロームの予防に役立つものがあります。また、運動の効果を高めたり、競技パフォーマンスを向上させる脂質があることも明らかになってきました。これらの機能性油脂がどのような機序により効果を発揮しているかを培養細胞や実験動物を用いて研究を行っています。



骨格筋のミトコンドリア酵素（左）、脂肪滴（中央）染色と細胞培養実験の様子（右）

■身体運動が骨格筋以外の組織に及ぼす影響に関する研究

最新の研究から、習慣的な身体運動は高齢者の脳機能改善効果や大腸がんの予防効果など、筋肉以外にも様々な影響を与えることが知られています。本研究室では、これまでに知られていなかった身体運動の効果、すなわち身体運動が体内の様々な臓器（胃や腸などの消化器官など）にも好ましい影響を及ぼしているのではないかと仮説をたて、実験動物や培養ガン細胞を用いて研究を行っています。

リンの代謝調節機構の解明と健康

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 生活栄養学科 講師 桑原 頌治

研究分野 : 栄養学、臨床栄養学、腎臓内科学

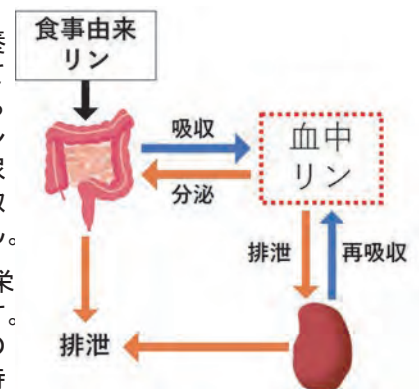
研究室HP : <https://statsumilab.weebly.com>

概要：栄養といえば、どれだけ食べるか、つまり量の確保が最大の課題であった時代があります。現在は飽食の時代とも呼ばれ、かつてよりは量の確保は容易になっています。量の確保が重要であった時代の栄養の問題は、主にエネルギーや特定の栄養素の摂取不足による低栄養でした。現在では、肥満やメタボリックシンドロームなど、むしろ摂取過多が大きな問題になっています。日本を筆頭に高齢化社会を迎えている現代に求められている栄養学的課題として、健康寿命の延伸、糖尿病性腎臓病に対する効果的な栄養介入やそれらの治療基盤となる基礎研究を行い、人類の健康に貢献することを目指しています。

■ “リン” と健康寿命

“リン” はヒトをはじめ、哺乳類にとって不可欠なミネラルの一つです。日本では食品の成分表示が義務では無いため、健康な人には縁のない栄養素かもしれません。しかし実は我々の体内で非常に重要な役割を果たしており、そのため、必須の栄養素となっています。摂取したリンは小腸から吸収され、血液循環を介して全身へ輸送されます。吸収されなかったリンは糞便として排泄され、また体内の不要（過剰）なリンは腎臓を介して尿中へ排出されます。そのため、腎機能が正常であれば、過剰にリンを摂取しても体内の恒常性は維持され、リンによる毒性は基本的には起きません。

一方、腎機能が低下している状態ではリン恒常性維持が破綻し、必須な栄養素であるにもかかわらず、リンが毒性を発揮することが知られています。リン毒性は寿命にも関連することが知られており、その解消が健康寿命の延伸につながると考えられます。しかし、実は、生体内のリン恒常性維持機構には未だに不明な点が多く、この解明が重要な課題です。

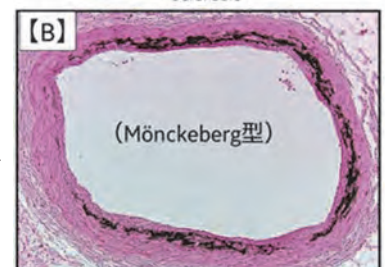


■ リン毒性の正体

腎機能の低下している状態だけでなく、慢性的なリンの過剰摂取は腎機能が正常でもリスクである可能性があります。そして現代の食生活はリンの過剰摂取が指摘されています。加工食品に含まれる添加物の多くがリンを含む化合物であるからです。

過剰なリン毒性として重要な病態は、異所性石灰化です。本来石灰化しない臓器が骨のように固くなってしまいます。特に血管の石灰化は生命予後に関与する重大な問題です。近年、過剰なリンがどのように悪影響をもたらすメカニズムとしてCPP（リン酸カルシムの結晶体）が報告されました。このCPPについて測定方法の検討や毒性の評価を行っています。

透析患者における中膜石灰化
高リン血症
Sclerosis



Contrib Nephrol. 2017;189:169-177 改変

■ 慢性腎臓病発症・進展メカニズム

慢性腎臓病患者は不可逆的な腎機能低下に伴い、最終的には腎代替療法を必要とします。これは患者のみならず、家族、社会的な負担の増加を招きます。未だに慢性腎臓病の抜本的な治療法は確立されておらず、その発症・進展機序も不明な点が多く残っています。これらの解明を目指した研究を行っています

子育てと子育て支援の科学

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 人間関係学科 教授 上野 有理

研究分野 : 発達心理学、比較認知科学

核家族化が進むなか、ひとり悩む保育者は少なくありません。子育て・子育て支援のためには、子どもの発達や保育者の気持ち、保育現場の現状を、科学的な視点から捉えることが大切だと考えます。そのために、おもに乳幼児期の母子に協力をいただいて実証研究をおこなっています。子育て応援ラボ「うみかぜ」を拠点にしたさまざまな活動により、子育て・子育て支援の実践や方法論の開発に寄与することをめざします。



■子どもの発達を知る：キーワードは「食」

子どもの食発達を研究しています。子どもの食をいかにすすめるかは、日々の保育において重要な課題です。どのような環境で子どもはよく食べるのか、周りの人と食をめぐってどのように関わるのかに、とくに注目してきました。

子どもの食は、他者との関わりを前提としてはじまります。大人だけでなく、子ども同士の関わりも大切です。日々繰り返されるそれらの関わりをとおして、子どもは食習慣を身につけていきます。大人の食習慣を理解するうえでも、発達の視点は大切です。

周りの人が深く長く子どもに関わりつづける食のスタイルは、人間に固有です。こうした食の特徴は、人間の進化と深く関わっているといわれています。子どもの食発達を理解することは、大人の食、そして人間を知ることにもつながります。「発達」と「進化」の視点から人間の本質を理解し、社会での実践につなげることをめざします。



食物を介し、母子は発達に応じたさまざまなやりとりをする。

■保育者の気持ちを知る

子育て・子育て支援のためには、保育者の気持ちに寄り添うことが大切だと考えています。保育に関わる思いは人それぞれです。その違いが生まれる背景を科学的に理解することで、保育者一人ひとりに寄り添う支援の形を模索します。

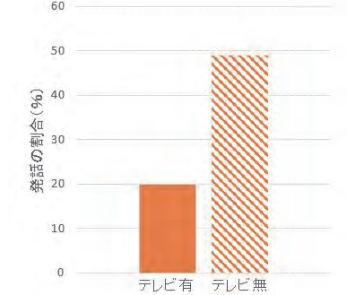
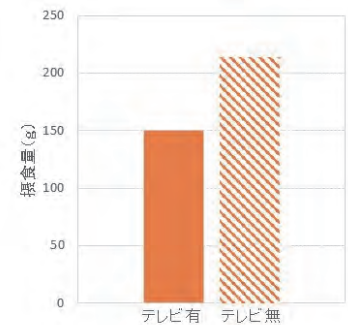
■保育の現場を知る

保育や学校関係者、保護者の方を対象に、勉強会や講演をしています。人間の子どもの成長には、とても長い時間がかかります。その成長を親だけで支えるのは難しく、進化の視点から見ると、コミュニティで協力して保育をするのが人間のスタイルです。現代の保育はどうでしょうか。保育の現場を知り、意見を交換する機会を大切にしています。



【文献】

上野有理・竹下秀子. (2017). テレビを視聴しながらの食事が幼児の食行動に与える影響. 小児保健研究, 76, 625-639.



食事時にテレビ視聴があると、摂食量が減り、子どもからの自発的な発話が減る(小児保健研究, 2017より作成)。

自治体・地域コミュニティの課題を社会的に診断する



人間文化学部 人間関係学科 教授 丸山 真央
研究分野：地域社会学、都市社会学

少子高齢化やグローバル化などの社会変動が都市や農山村を大きく変えつつあります。基礎自治体や地域コミュニティが直面する様々な課題に向きあううえで、現状を的確に把握することが不可欠です。その際、キーパーソンの方々にじっくり話を聞いたり、広く住民の方々に質問紙に答えてもらったりする社会調査の手法が有効です。お仕着せの解決策に頼らず、必要な処方箋を明らかにするためにも、そうした社会調査の手法を多角的に駆使しながら現状を精確に把握することをめざしています。

人間文化学部

■「つながり」から農山村を捉えなおす

高齢化や人口減少が進行する農山村の今後を考えるうえで、定住人口だけでなく「移動」「交流」「関係」を視野に入れる発想が必要な時代を迎えています。そこでカギとなるひとつが、農山村から進学や就職を機に都市に出た人びとです。このような「他出家族」が、都市に移り住んだあとも様々な形で出身地と「つながり」を保っていることは、地域社会学が古くから明らかにしてきました。

私たちは、全国有数の高齢化の進行している山間地域や、人口減少に直面する大都市圏縁辺地域などでの調査を通じて、こうした他出家族員の動向に注目しています。U・Iターンを考えている人はそれほど多くなくても、定期的に帰省して老親の生活や家の維持を支えている人は少なくありません。都会に出た子どもたちに農産物や加工品を送ることで、農地の荒廃防止につながっているという側面も見出せます。

こうした「つながり」は、既存の統計では把握しづらいものですが、社会調査の手法で「つながり」を可視化し、地域の新たなポテンシャルが浮かびあがらせています。

■地域社会の「小さな自治」の可能性を探る

「平成の大合併」の中で市町村合併を経験し「小さな自治」の基盤を失った地域は少なくありません。そうした中で、地域自治区制度を導入したり、新しい住民組織を立ち上げるなどして「小さな自治」をつくりなおす試みが、各地で取り組まれています。

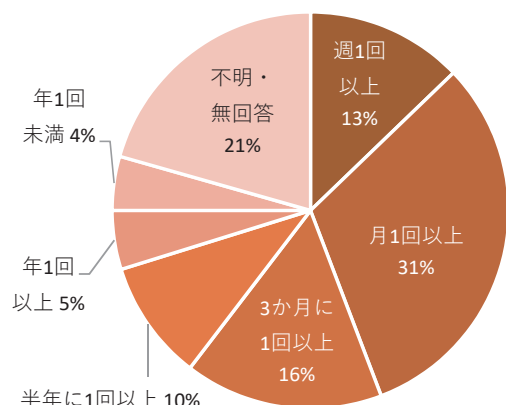
私たちは、各地の合併自治体（静岡県浜松市、新潟県上越市、岩手県大船渡市等）での徹底した現地調査や住民を対象とする質問紙調査によって、地域自治の実態と課題を探っています。地域協議会の活性化を通じて地域課題の解決をめざしたり、交通過疎やフードデザートなどの問題に取り組む住民組織が活躍したりするなど、各地で多様な取り組みがみられる一方で、高齢化や人口減少の中での担い手不足をはじめ、様々な課題も明らかになってきています。

■「新しい都市問題」を探る

地方都市や農山村で人口減少が進行する一方で、大都市圏では人口集中が進んでいます。東京・大阪・名古屋をはじめとする大都市の都心地区に林立するタワー型マンションはその象徴的な景観です。そうした都心地区では、急激な人口増加に伴って、様々な地域問題が生じています。学校や保育所など社会的インフラの不足、住民の「つながり」不全、様々な「格差」の拡大は、「新しい都市問題」の一例です。

私たちは、国内の6つの大都市圏で都心地区の住民に質問紙調査をおこなったり、東アジアの大都市圏との比較をおこないながら、21世紀の「新しい都市問題」とそこで必要な都市ガバナンスのあり方を考えています。そのことを通じて、持続可能な大都市のあり方、都市と地方の望ましい関係を探っています。

最も頻繁に帰省してくる
他出家族員はどのぐらい帰省するか



(滋賀県竜王町内6地区の全世帯主を対象とする「家族・地域のつながりに関する調査」(2018年実施)の結果より)

ひきこもり等の状態にある若者への支援

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 人間関係学科 准教授 原 未来

研究分野：若者支援、ひきこもり、青年期教育

ニート・ひきこもりなどの状態にあり、生きづらさを抱えた若者たちは、今日数多く存在しています。かれらが再び社会に参加し、自らの人生を歩んでいくためには、どのような支援や仕組みが必要なのでしょうか。支援という言葉を超えて、協同・地域づくりの観点から、自治体・支援現場の方々や若者と共に、実践・研究を進めていきたいと考えています。

■若者たちが集う「居場所」づくり

ニートやひきこもり状態にある若者たちへの支援方途の一つとして、フリースペースを中核とした支援が注目されています。傷つき、孤立してきた若者たちが、自由に集い、交流することを通じて、自信や他者への信頼を回復していく場所であり、「居場所」と呼ばれることもあります。

2016年度には、地域子ども・若者支援の拡張を目指した彦根市と共同研究をおこない、市内に、若者たちが集うことのできるサロンを開設しました(右図)。ニート・ひきこもり等の経験のある若者たちが参加し、短期間に、①他者関係の広がり、②主体的な行動の増加、③情緒面での安定・充実などの変化が見られました。地域商店の方々との協同・連携も進んでおり、孤立していた若者が地域に参加し、それによって地域も活気づいていくといった循環が生み出されようとしています。なお、本サロンは2017年度からは市内のNPO団体が運営し継続しています。

「人とのコミュニケーションが苦手...」「家にひきこもりがち」など、生きづらさを感じていませんか？
通信サロンは、そんな悩みを抱えた若者たちが集う居場所です。お茶を飲みながらおしゃべりしたり、ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしたり...
「ひとりで過ごすのもOK」「みんなと過ごすのもOK」な場所です。仲間と出会うなかで、一緒にこれからのことを考えてみませんか。

費用：無料
対象：おおむね15才～39才
日時：毎週火・木 11:00～16:00

見学・お話しもお気軽に お問い合わせください

彦根市は、彦根市立総合高等学校内に「ていしん 通信サロン」を開設し、2016年度に開校しました。
彦根市立総合高等学校 彦根市河原 2丁目3-4 (通信舎1階)
多岐駅から徒歩17分
ひこね庁舎から徒歩9分

お問い合わせ
彦根市子ども・若者課
TEL 0749-49-2251

■若者支援にかかわるスタッフの専門性の探究

ひきこもりなどの状態にある若者たちへの支援は「若者支援」と呼ばれ近年急速に拡大しました。しかし、その支援に関わる専門性については、学術的にも実践的にも体系的に明らかにされているとは言い難い状況にあります。そのなかで、暴力的な手法によって若者を変容させようという取り組みが「支援」の名の下におこなわれていることすらあります。

若者たちにかかわるスタッフに求められる理念・知識・技能とは、どのようなものなのでしょうか。現場と共に探求する必要があると考えています。不登校・ひきこもり支援をおこなってきた団体や、青少年育成を担ってきた団体、学童保育を担ってきた団体など、さまざまな団体のスタッフと実践を共有・議論するなかで、若者支援員の専門性とは何か、探求を続けています。

■地域における若者支援体制構築への寄与

2010年に「子ども・若者育成支援推進法」が施行されました。それに伴い、子ども・若者支援地域協議会を設置する自治体も増えてきています。滋賀県・彦根市の地域協議会に参加するとともに、自治体や地域の若者支援団体のスーパーバイズなども引き受けています。地域子ども・若者支援体制をいかにしてつくりあげていくか、各地域の特性をベースに共に知恵を出し合いたいと考えています。

また、「甘えた若者」とみなされやすい今日において、若者の状況への正しい理解や若者支援体制構築の必要性を社会的に発信していくための活動として、講演活動もおこなっています(講演タイトル「現代の子ども・若者の実態と支援」「子どもの〈主体性〉を支える大人と地域」など)。

<共同研究・協同実践等の状況>

彦根市子ども・若者課(2016年)、NPO法人芹川の河童(2016年～)、公益財団法人京都市ユースサービス協会(2015～2018年)、滋賀県精神保健福祉センター(2015年～)、あいとうふくしモール(2019年～)等

人の主体的なふるまいに関する心理学研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 人間関係学科 講師 後藤 崇志
研究分野 : 社会心理学・教育心理学・認知心理学
研究室HP : <http://g01beza.web.fc2.com/>

人の主体的なふるまいに関わる心の仕組みに関心を持っています。具体的には、動機づけ・感情・意思決定等に関わる心理概念の研究を通じて、主体的なふるまいが実現されるメカニズムを明らかにしたいと考えています。また、パーソナリティ発達や社会化のプロセスにも関心があり、個人の価値や認知処理への社会的影響についても明らかにしたいと考えています。心理実験や質問紙調査、実践研究等の多様なアプローチから心の仕組みを明らかにし、社会・教育の改善に活かす知見の創出を目指しています。

■主体的なふるまいを実現する心の仕組みに関する研究

私たちの行動選択の多くは、過去の経験や、周囲の環境・他者・出来事などの影響を受けています。実際に私たちが「いま、ここ」でおこなっている行動の選択とそれに伴う自分の意志に関する感覚が、どのような情報処理によって実現し、どのような機能を持っているのか、を明らかにしていきたいと考えています。具体的には、1) 私たちは「やりたいこと」「やらなければならないこと」といった価値観をどのように獲得しているのか、2) そうした価値観はその後のふるまい方にどのような違いをもたらすのか、3) これらの気持ちが引き起こす葛藤にどのように対処しているのか (or 対処するのがよいのか) といった問いを明らかにするために心理学の実験や調査による実証研究を進めています

最近の主な研究成果 :

Goto, T., Ishibashi, Y., Kajimura, S., Oka, R., & Kusumi T. (2018) Belief in free will indirectly contributes to the strategic transition through sympathetic arousal. *Personality and Individual Differences*, 128, 157-161.

■人の主体的なふるまいに関わる社会・教育のデザインに関する研究

教育実践の専門家との共同研究として、人の主体的なふるまいに関する心理学的な知見や手法を活かした社会・教育のデザインに関する研究を行っています。すべての学習者が生まれ育った文化的背景に関わらず主体的に学び続けられる社会を目指し、1) 主体的な学びを妨げている要因を明らかにすること、2) 主体的な学びを促す教育機会をあらゆる人々に届ける実践を開発すること、3) 主体的な学びを牽引する教材やテストを開発すること、を進めています。研究成果や実践活動を発信するためのポータルサイトを作成しました。随時、成果を更新していきますので、ぜひご覧ください。

インクルーシブSTEMポータル <http://i-stem-edu.jp/>

最近の主な研究成果 :

後藤崇志・石橋優也・後藤大樹 (印刷中) 親の学習観と子の学習への取り組みの関連の予備的検討 日本教育工学会論文誌

加納圭・後藤崇志・塩瀬隆之 (印刷中) 全国学力・学習状況調査「小学校理科」の教科横断的分析 科学教育研究

Goto, T., Nakanishi, K., & Kano, K. (2018) A large-scale longitudinal survey of participation in scientific events with a focus on students' learning motivation for science: Antecedents and consequences. *Learning and Individual Differences*, 61, 181-187.

<特許・共同研究等の状況>

・彦根・長浜市内の学習塾との共同研究を行っています

チベットの社会と歴史

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 国際コミュニケーション学科 教授 棚瀬 慈郎
研究分野 : 文化人類学、チベット地域研究

■チベットの村落社会研究

インド、ヒマーチャル・プラデーシュ州やジャンムー・カシミール州のチベット系民族の住む村落では、高い標高に適応した生業と、独特の社会システムを発達させてきました。またこの地域では仏教が深く信仰され、各地に壮麗な僧院建築が存在します。チベット社会の特徴と、特に宗教との関連について研究してきました。



西チベット、スピティ地方の僧院



東チベット、ラブラン僧院にて

■チベット近代史への関心

チベットを巡る現在の政治状況を理解するためには、19世紀末から20世紀半ばに至る歴史を検討する必要があります。特にダライラマ13世の政治的アドバイザーであり、外交を担ったアグワン・ドルジーエフ(1854-1938)に着目し、その評伝を発表しました。

■現代中国における「少数民族」としてのチベット族について

現代中国では、チベット族は55の少数民族の一つとしての位置づけをされています。中国で社会調査をすることは色々と困難を伴いますが、少数民族政策や経済的変化の影響について研究を進めています。

日本語モダリティと中国語モダリティの対照研究



人間文化学部 国際コミュニケーション学科

教授 吳 凌非

研究分野 : 言語学、言語処理、中国語教育

■研究課題（研究概要）

言語処理の視点からは、文（sentence）は客観事実を表す部分（命題）とその客観事実を伝える際に話者が加えた付加情報の部分（モダリティ）から成り立っている。命題については日本語及び中国語から大量の言語データをもとにその意味を記述する意味構造を明らかにする。モダリティについては、まず分類を行い、日本語モダリティと中国語モダリティの対照研究を行う。

近年は、中国語動詞の分類や否定表現、そしてデジタル文法論に重点を置き、研究を行っている。

研究業績等(概要)

論文

1988.10 ECAT-P英中自動翻訳システム『情報科学』

2002.10「動詞の周期性及びその周辺」『現代中国語研究』

2018.6 On the Trace in “ba” Sentences and Its Pedagogical Effect.. Applied Chinese Language Studies IX. London. pp50-56.

計32篇

学会発表:

2007.10.28.「動詞の周期から見る了1と了2」日本中国語学会

計9篇

国際学会発表

2019.8 11th Asia-Pacific Consortium of Teaching Chinese as an International Language

アジア太平洋地域国際中国語教育学会シンガポール南洋理工大学.『怎样解释“只”与“只是”的区别?』

計12篇

著書

1999.4 「中国語を楽しもう」吳凌非 郁文堂

2000.12 「日本語の語彙・文法」共著、くろしお出版

2004.1 「大学生のための基礎中国語」吳凌非 郁文堂

2010.4 「ジョイフル中国語」吳凌非 郁文堂

2012.4 「ジョイフル中国語」初級編 吳凌非 郁文堂

2015.6 『漢語独特性研究と探索』共著 学林出版社(中国上海)

翻訳

1993.4 Situational Functional Japanese Vol. I . II . III. 吳凌非 筑波大学ランゲージグループ

認知言語学・語用論・言語類型論

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 国際コミュニケーション学科 教授 小熊 猛
研究分野 : 認知言語学、英語学、英語教育

概要：人間の言葉には、通言語的に普遍性が見出せる側面と個別言語に特徴的側面という二面性が観察されます。前者は私たち人間の「認知」、後者は「文化」を反映していると言われます。人間はみな同じ生物学的な制約を有するため、英語であれ、日本語であれ、私たち人間に共通の認知のメカニズムに基づいて言語化を行っていると考えられるのです。ただ、この言語化の過程には様々な認知プロセスが複雑に競合していると考えられ、競合する認知プロセスのいずれを強くは反映するかについては言語によって異なると考えられています。こうした言語観に立ち、英語と日本語を中心に認知プロセスに還元した構文比較対照研究を行っています。

■英語に関する研究

日本語に翻訳するとその違いが見えない英語の類語、類似表現には一体どのような違いが認められるのかに関心を寄せて研究を行っています。例えば、英語の *shore* と *coast* という語彙はそれぞれ異なる視点を反映しており、前者は海上に浮かぶ船から見た海岸線を、後者は陸地側から見た海岸線を指すと指摘されています。また、語彙ばかりでなく構文もまた意味を担っていることも指摘されています。S+MAKE+NP1+NP2構文は「主語の一存で実現できる」事象を表すと一般化でき、それゆえ、*He made his son a secretary.* (息子を秘書にした) と言える一方で、*He made his son a doctor.* (息子を医者にした) とは言えません。

- ・類義語の意味比較研究
- ・構文の意味構造に関する研究
- ・コーパスを活用した意味研究

■英語と日本語およびその他の言語との比較対照研究

文法的であるということは、自然であり母語話者が一般に使う言い回しであることを必ずしも意味しません。例えば、*He goes to school by bike.* は文法的ですが、アメリカ英語では *He bikes to school.* イギリス英語では *He cycles to school.* と一般に表現します。

- ・日英の構文比較対照研究
- ・原典と翻訳をパラレルコーパスとして用いる対照比較研究

■英語教育への言語学的知見の応用

県立高等学校、国立高等専門学校といった後期中等教育機関で英語教員として教鞭をとった経験を活かし、そこから見てきた現状の英語教育の問題点とこれからの英語教員に求められる知識とスキルについて、文法項目の効果的な導入順序ならびに教授法を考察・研究しています。

- ・学習者の躓きとその要因に関する考察研究
- ・より教育的効果が期待できる教授法のあり方に関する研究
- ・英語で英文法を教えることに関する研究 [参考: 小熊・中谷. 2020. 「新学習指導要領における文法指導に関する一察」『人間文化』48. 74-77.] (<http://usprepo.office.usp.ac.jp/dspace/handle/11355/590>)

■言語と文化の接点などを巡る研究

外国語としての英語習得においては、文法のみならず異文化理解の観点も重要な役割を果たしています。英語のように対話相手との「親しさ」を表現することでいい関係を実現しようとする傾向のあるタイプの言語もあれば、日本語のように相手への敬意を明示的に言語化することで適切な心理的距離をとって良好な関係を実現しようとする傾向のあるタイプもあると指摘されています。こういった文化的側面を視野に入れた研究も行っています。

「よく食べる」とはどのようなことか

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 国際コミュニケーション学科
准教授 橋本 周子
研究分野 : 思想史

近代フランスにおける〈美食〉言説に関する思想史的研究

■ これまでの主な研究

〈美食〉に関する限り、フランスは特徴的な国である。世界的にも優越的であるとの自他の評価が認められること、さらにそれに関する言説が歴史を通じ、相対的にみて豊富であることがその理由として挙げられる。フランスではとりわけ、料理書など作り手によるもののみならず、食べ手による言説において際立った特徴が見られる。

この文脈において最も注目すべきは、美食批評の先駆的存在とされるグリモ・ド・ラ・レニエール(1758-1837)である。これまでの研究では、その主著『美食家年鑑 Almanach des Gourmands』(1803-1812)および彼の伝記的事実を併せて分析し、彼を(i) 18世紀啓蒙に憧れ著作した一人の文人として、(ii) 革命後の社会の変容に嘆く観察者として、(iii) 過去の遺産のすべてを放棄するのではなく、そこから守るべき社交性をすくいあげ、それを新時代へと繋いでいこうとする思想家として考察した。

以上の研究成果をまとめた拙著『美食家の誕生』は、第31回渋沢・クローデル賞特別賞を受賞、さらに自身によるそのフランス語版 *La Naissance du gourmand* が2019年、食文化に関して執筆された教養書に贈られる第4回アントニー・ローリー賞をフランス国内にて受賞した。

■ 現在の研究テーマ

現在は複数の研究テーマを同時に進行している。

その一つをあげれば、同時代(18・19世紀)日本との比較研究がある。これまでの研究によって培った方法論を、日本の事例にも応用し、両国の食について対比研究を行う。具体的には、現代に至る〈食に対する愛着〉の原点を、18・19世紀にかけての日本・フランスに見定め、各文化固有の感性がいかに醸成されるか、またその内実を明らかにする。さらにそうした感性が、事物や言説にいかん表現されるかを検討するとともに、政治的・社会的文脈における意義について考える。

拙速な結論を急がず、長期にわたる地道な作業により、後世に遺す価値ある研究成果を出せるよう目指したい。

認知言語学・語用論の知見を英語授業に活用する研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部 国際コミュニケーション学科

講師 中谷 博美

研究分野：認知言語学、語用論、英語教育

認知（ものの捉え方）がどのように文法に反映されているのか（＝認知文法理論）、語用論とは、発話（何かを言うこと）が会話においてどのような意味を持つのか（＝語用論）を実際の会話に基づいて研究してきた。この認知文法理論および語用論の研究成果を、英語の授業において、教師がどのように活用すれば学習者の第二言語習得に貢献できるのかを研究する。

■文末表現のマルチモーダル分析

英語の付加疑問文について、研究を進め、昨年度はアジア諸言語への応用を試みました。文末表現の意味分析において、不可欠な要素となるイントネーションについて、今年度は研究を進める計画です。先行研究では、典型例である上昇調と下降調のみが説明されていますが、実際の例文では、下図のように付加部の音声は平坦である場合もあります。

この例文は、映画ハリーポッターの一場面です。誕生日のお祝いに来たハグリッドに対して、ハリーはかねてからの疑問を突き付けています。（前のシーンでハリーは自分の額の傷がヴォルデモードによってつけられたと知る。）

イントネーションが平坦で次の台詞との間がないことから、聞き手にすぐにターンを渡す意図がない（疑問ではない）ことがわかります。また、話し手は発話の間ずっと聞き手に視線を向けているが、聞き手は話し手に視線を向けるがすぐにそらしています。このことから、聞き手にとって都合の悪い情報であり、返答しにくいことだとわかります。それゆえ付加部によって返答なしでも話し手の推測が事実であることを共有し、かつ談話を促進させようとする意図が読み取れます。付加疑問文の意味は、イントネーションや視覚情報など非言語的要素を統合したマルチモーダル分析によって解明されると言えます。

HAGRID: You all right, Harry? You seem very quiet.

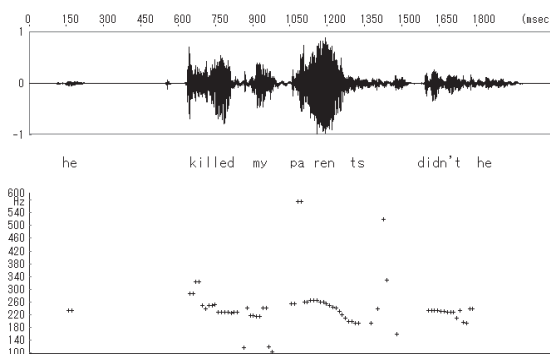
HARRY: He killed my parents didn't he? The one who gave me this.
You know, Hagrid. I know you do.

HAGRID: First, and understand this, Harry, because it's very important.

Not all wizards are good. Some of them go bad.

A few years ago, there was one wizard that went as bad as you can go.

And his name was V-. His name was V-.



<例文出典>

Heyman, David (producer) and J.K. Rowling (original author) (2001) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*

<音声分析>

杉藤美代子(2000)SUGI Speech Analyzer. 富士通アニモ

■映像教材の応用に関する研究

前年度に引き続き、映像教材を活用した指導法について研究を進めています。英語学習において授業で用いるのに効果的な例文を含む映像の提示方法について、前述のマルチモーダル分析を活かして考案します。

【滋賀県立大学 研究者一覧】

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
環境生態学科	教授	西田 隆義	生態学
	教授	小泉 尚嗣	地震地下水学 地震, 地下水, 地殻変動
	教授	伴 修平	水圏生態学、プランクトン生態学
	教授	丸尾 雅啓	水圏化学、分析化学
	教授	浦部 美佐子	陸水生物学, 生態, 底生動物, 寄生虫, 分類
	准教授	野間 直彦	植物生態学
	准教授	後藤 直成	陸水学, 環境科学, 生物地球化学, 物質循環
	准教授	吉山 浩平	理論生態学
	准教授	堂満 華子	古環境学, 微古生物学 (浮遊性有孔虫)
	准教授	細井 祥子	環境微生物学、分子微生物学
	講師	籠谷 泰行	森林生態学
	講師	肥田 嘉文	環境科学、影響評価科学
	講師	尾坂 兼一	森林水文学 生物地球化学
	講師	工藤 慎治	大気科学, 大気汚染物質, 環境動態, 発生源解析
環境政策・計画学科	教授	金谷 健	廃棄物管理論
	教授	井手 慎司	水環境管理
	教授	上河原 献二	環境法、環境政策、地球環境条約制度、自然保護制度、外来水生植物管理
	教授	高橋 卓也	環境経営, 森林政策・計画
	教授	香川 雄一	環境地理学、都市社会地理学、政治地理学
	准教授	瀧 健太郎	流域政策・計画、EcoDRR、グリーンインフラ、防災・減災
	准教授	林 幸司	環境経済学, 環境政策
	准教授	村上 一真	環境経済学, 開発経済学, 環境政策論, 地域経済・政策論
	准教授	和田 有朗	環境政策, 環境計画, 環境システム, 地域システム
	講師	平岡 俊一	持続可能な地域づくり、市民参加・協働、NPO、環境社会学
	講師	平山 奈央子	湖沼流域ガバナンス、水資源管理、住民参加
講師	白木 裕斗	エネルギーシステム学, 環境システム学	
環境建築デザイン学科	教授	陶器 浩一	建築設計、構造計画
	教授	村上 修一	ランドスケープデザイン、景観計画
	教授	高田 豊文	建築構造学 応用力学 木質構造 地震防災
	教授	白井 宏昌	建築史、建築設計理論
	教授	芦澤 竜一	環境建築学
	准教授	金子 尚志	都市・建築環境設計、パッシブデザイン、クリマデザイン (室内気候のデザイン)
	准教授	ヒメネス ベルデホ ホアン ラモン	建築史・意匠 都市計画・建築計画
	准教授	轟 慎一	都市計画、地域計画、都市政策、地域環境デザイン、景観論、集落論、生活空間論
	准教授	山崎 泰寛	近代建築史、建築メディア論、展覧会
	准教授	川井 操	都市史、建築計画
	講師	迫田 正美	建築歴史・意匠、建築空間論
	講師	高屋 麻里子	日本建築史、都市史
	講師	鄭 新源	建築環境工学、建築環境設備、環境性能評価、環境心理
講師	永井 拓生	建築構造、構造力学、数値解析、自然素材、建築保存・再生	
生物資源管理学科	教授	大久保 卓也	環境工学、水質工学、生態工学、水文学
	教授	須戸 幹	環境化学
	教授	杉浦 省三	魚類栄養学、養魚飼料学、水産増養殖
	教授	泉 泰弘	作物学、栽培学
	教授	原田 英美子	植物科学、重金属、水生植物、伊吹山
	教授	入江 俊一	応用微生物、分子生物、バイオマス変換、リグニン、木質バイオマス
	准教授	岩間 憲治	土壌物理学、灌漑排水学、GIS (地理情報システム)
	准教授	上町 達也	園芸学
	准教授	高倉 耕一	個体群生態学、行動生態学
	准教授	清水 顕史	植物遺伝育種学
	准教授	増田 清敬	LCA、環境経済学、農業経済学
	准教授	皆川 明子	生態工学、農業土木
	講師	飯村 康夫	土壌学
	講師	畑 直樹	蔬菜園芸学、植物工場
	講師	泉津 弘佑	植物病理学
	講師	中川 敏法	反芻家畜、飼料開発、未利用資源、家畜飼養学、飼料開発学、動物栄養学
	講師	住田 卓也	植物病理学
講師	加藤 恵里	獣害対策、農村ホスピタリティ、農山村、コミュニティ、自然、地域資源、地域振興、野生動物管理	

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
材料科学科	教授	バラチャンドラン ジャヤデワン	金属材料、材料科学、ナノ材料化学
	教授	松岡 純	ガラス科学、熱物性、力学特性、無機材料
	教授	奥 健夫	エネルギー環境材料、光、量子情報、エネルギー、太陽電池
	准教授	宮村 弘	金属材料学、金属間化合物、表面処理
	准教授	秋山 毅	エネルギー環境材料
	講師	鈴木 厚志	エネルギー環境材料 太陽電池 量子コンピューター
	講師	鈴木 一正	有機-無機複合材料、蛍光材料、溶液プロセス
	教授	徳満 勝久	有機複合材料、高分子物性
	教授	金岡 鐘局	高分子精密合成、高分子機能
	教授	北村 千寿	有機環境材料、有機化学
	准教授	竹下 宏樹	高分子構造、高分子物性
	准教授	谷本 智史	高分子機能設計、ブロックポリマー、相分離、ミセル、ペプチド、吸着、表面、界面、微粒子、バイオミネラリゼーション、キチン・キトサン、貴金属イオン
	准教授	加藤 真一郎	構造有機化学、超分子化学、物理有機化学
	講師	竹原 宗範	生体機能材料、応用微生物学、遺伝子工学、生物学、有機環境材料
	講師	伊田 翔平	高分子合成、精密合成、リビング重合、高分子ゲル
工学部 機械システム 工学科	教授	安田 寿彦	福祉ロボット、メカトロニクス、非線形システム
	教授	山根 浩二	内燃機関、バイオディーゼル、燃焼、ディーゼル噴霧、油化学
	教授	南川 久人	流体工学、混相流工学、気泡工学、ファインバブル
	教授	奥村 進	ライフサイクル工学、品質設計、メンテナンス工学
	教授	門脇 光輝	偏微分方程式論、特に数学的散乱理論
	教授	呉 志強	振動工学、計算工学、振動、共振、形状最適化、最適設計、FEM解析
	教授	田邊 裕貴	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
	准教授	山野 光裕	ロボット工学、メカトロニクス、機械制御
	准教授	橋本 宣慶	生産加工学、人間工学、人工現実感
	准教授	河崎 澄	エネルギーと動力、燃焼工学、内燃機関
	准教授	安田 孝宏	流体工学
	准教授	大浦 靖典	機械ダイナミクス、振動工学
	准教授	和泉 遊以	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
	講師	西岡 靖貴	アクチュエーター、ソフトメカニクス、空気圧制御システム
	講師	田中 昂	機械力学、振動工学、構造ヘルスマニタリング
電子システム 工学科	教授	柳澤 淳一	デバイス工学、半導体プロセス工学、イオンビーム工学
	教授	岸根 桂路	集積システム、アナログ・デジタル融合集積回路
	准教授	一宮 正義	デバイス工学、光物性、超高速分光
	准教授	土谷 亮	集積回路、アナログRF回路、低消費電力技術
	講師	井上 敏之	集積回路、無線通信、光ファイバ無線
	教授	乾 義尚	パワーエレクトロニクス、電力工学、エネルギー変換、燃料電池
	教授	作田 健	センシング工学、磁気計測、磁気センシング応用
	准教授	坂本 真一	熱音響工学、超音波エレクトロニクス
	講師	平山 智士	電磁流体力学、プラズマ工学
	教授	酒井 道	メタマテリアル科学、プラズマ理工学
	教授	砂山 渡	データマイニング、知能情報工学、教育工学
	准教授	宮城 茂幸	デジタル信号処理、画像処理、時系列解析
ガラス工学 研究センター	講師	山田 明寛	無機材料
	講師	出島 一仁	熱工学、伝熱工学、MEMS

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
地域文化学科	教授	中井 均	日本考古学
	教授	市川 秀之	日本民俗学
	教授	亀井 若菜	日本美術史
	教授	京楽 真帆子	平安京、都市社会史、女性史
	教授	東 幸代	日本近世史
	教授	塚本 礼仁	人文地理学
	教授	石川 慎治	保存修景、建築史
	准教授	萩原 和	景観まちづくり、都市農村における地域計画
	准教授	横田 祥子	社会人類学、宗教人類学、地域研究
	准教授	櫻井 悟史	歴史社会学、文化社会学、犯罪社会学、日本近現代史
	准教授	金 宇大	世界遺産学、アジア考古学
	講師	木村 可奈子	東アジア国際関係史
	講師	高木 純一	日本中世史、村落史
	生活デザイン学科	教授	宮本 雅子
教授		印南 比呂志	地域デザイン、道具デザイン、伝統産業、ブランディング、地場産業論、伝統工芸、職人研究
教授		森下 あおい	服飾デザイン、家政・生活学一般
教授		藤木 庸介	建築計画、伝統的居住文化の維持・保全、都市計画、家政・生活学一般、自律的観光
准教授		横田 尚美	服飾文化史、西洋服装史、日本洋装史
准教授		山田 歩	行動経済学、ナッジ、消費者心理学、マーケティング
講師		佐々木 一泰	空間デザイン、建築デザイン、構法研究、建築史・意匠、家政・生活学一般
講師		南 政宏	プロダクトデザイン、ブランディングデザイン、デザインディレクション、家政・生活学一般
講師	徐 慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、イラストレーション	
生活栄養学科	教授	矢野 仁康	病態栄養学、分子細胞生物学
	教授	中井 直也	運動栄養学
	教授	辰巳 佐和子	臨床栄養学、腎臓内科学、骨代謝学
	教授	福渡 努	栄養神経科学、栄養生理学、食品機能学 食品、栄養、代謝
	准教授	奥村 万寿美	臨床栄養学、栄養食事指導、食育、栄養教育、給食経営管理
	准教授	廣瀬 潤子	食品免疫学、栄養教育論、小児栄養
	准教授	佐野 光枝	食品学、栄養生化学、分子栄養学、発生生物学、食生活学
	准教授	遠藤 弘史	病態栄養学、分子細胞生物学
	准教授	今井 絵理	公衆栄養学、栄養疫学、応用栄養学、食生活学
	准教授	東田 一彦	運動生理・生化学、スポーツ栄養学
	講師	桑原 頌治	栄養学、臨床栄養学、腎臓内科学
	講師	畑山 翔	基礎栄養学
講師	田中 大也	病態栄養学、分子細胞生物学	
人間関係学科	教授	高梨 克也	コミュニケーション科学、身体動作学
	教授	松嶋 秀明	臨床心理学
	教授	上野 有理	発達心理学、比較認知科学、霊長類学
	教授	丸山 真央	地域社会学、都市社会学
	准教授	大野 光明	歴史社会学、社会運動論、社会運動史、沖縄、軍事化、「戦後」史
	准教授	木村 裕	教育方法学
	准教授	杉浦 由香里	教育学
	准教授	原 未来	若者支援、ひきこもり、青年期教育
	講師	中村 好孝	社会学（社会学史、障害者福祉）
	講師	後藤 崇志	社会心理学・教育心理学・認知心理学
国際コミュニケーション学科	教授	棚瀬 慈郎	文化人類学、チベット学、チベット地域研究
	教授	呉 凌非	言語処理・言語学
	教授	ジョン リビー	英語
	教授	ボルジギン プレンサイン	社会史、現代中国研究、モンゴル研究
	教授	小熊 猛	認知言語学、英語学、英語教育
	准教授	山本 薫	英文学・英国小説
	准教授	吉村 淳一	ドイツ語学
	准教授	河 かおる	朝鮮近代史
	准教授	マーティン ネークス	留学英語対策講座
	准教授	橋本 周子	思想史、文化史、フランス史
	講師	谷口 真紀	新渡戸稲造研究、ジーン・シャープ研究 クエーカー信仰・国際平和・非暴力
	講師	中谷 博美	認知言語学、語用論、英語教育

人間文化学部

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード	
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹 君和	基礎看護技術、教育学
		教授	本田 可奈子	救急看護、看護教育、看護管理
		教授	安原 治	神経生理学・神経科学一般 神経内科学 神経解剖学・神経病理学 解剖学一般（含組織学・発生学）
		准教授	米田 照美	基礎看護学、看護管理学、医療安全教育、危険認知、視線計測、看護師（看護学生・看護師）
		講師	関 恵子	基礎看護学
		講師	千田 美紀子	基礎看護学
		教授	岩谷 久美子	生涯発達看護学、母性看護学、助産学、助産管理、安全管理
		教授	古株 ひろみ	臨床看護学、小児看護、家族看護
		教授	越山 雅文	産婦人科学、母性看護・助産、女性の健康・周産期ケア、浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防
		准教授	板谷 裕美	母性看護学、助産学、母乳育児、助産ケア
		准教授	川端 智子	小児看護、子どもと喫煙、未成年の喫煙防止教育、NICU
		准教授	古川 洋子	地域看護学、母性看護学、助産学、いのちの教育、産み育て支援、社会的養護
		講師	玉川 あゆみ	地域看護学、小児看護学、発達障害児の外來受診、家族支援
		講師	藤平 麻理子	生涯発達看護学、母性看護学、助産学、シミュレーション教育、医療安全教育
		講師	渡邊 友美子	母性看護学、助産学
		助手	濱野 裕華	母性看護学、助産学
		教授	糸島 陽子	エンドオブライフケア、成人看護学、生命倫理
		教授	横井 和美	臨床看護学、基礎看護学、慢性期の看護、看護管理
		准教授	荒川 千登世	臨床看護学、成人看護学、急性期ケア、回復期ケア、看護教育
		准教授	岡本 紀子	老年看護学、感染予防
		講師	生田 宴里	臨床看護学、クリティカルケア看護、成人看護学
		講師	岡崎 瑞生	看護学、老年看護学、生活の質
		講師	小野 あゆみ	成人看護学、慢性期ケア、肝疾患患者の看護
		講師	片山 将宏	成人看護学、慢性疾患看護、脳血管障害、外來看護
		講師	喜多下 真里	成人看護学、がん看護、緩和ケア
		講師	中川 美和	成人看護学、慢性期ケア、糖尿病患者の看護
		講師	松井 宏樹	老年看護学
		教授	甘佐 京子	生涯発達看護学、精神看護学、家族看護学、学校精神保健、家族支援、早期介入
		教授	河野 益美	地域看護学、在宅看護学、在宅緩和ケア、家族支援
		准教授	小林 孝子	公衆衛生看護学
		准教授	馬場 文	公衆衛生看護学、児童虐待防止対策
		准教授	牧野 耕次	生涯発達看護学、精神看護学、かかわり、巻き込まれ、involvement
		准教授	森本 安紀	在宅看護学、民俗学
		講師	川口 恭子	公衆衛生看護学、保健師活動、ひきこもり、家族支援
講師	下通 友美	精神看護学		
助手	門田 奈都紀	公衆衛生看護学		
助手	國丸 修平	成人看護学		
准教授	大脇 万起子	臨床看護学、家族看護、育児・療育支援、ツール開発		
全学共通教育推進機構	教授	福井 雅英	臨床教育学、教師教育、教育実践史	
	准教授	坂本 輝世	外国語教育論、ライティング教育	
地域共生センター	准教授	鶴飼 修	都市計画・建築計画、地域研究、地域計画、地域活性化、環境共生まちづくり、コミュニティ・ビジネス	
	講師	上田 洋平	地域学、地域文化学	
地域ひと・モノ・未来情報研究センター	准教授	杉山 裕介	偏微分方程式	

※詳しい研究者情報は、ホームページ (<http://db.spins.usp.ac.jp/>) をご覧ください。

受付年月日	年 月 日
受付番号	—

技術相談ニーズ調査票

滋賀県立大学

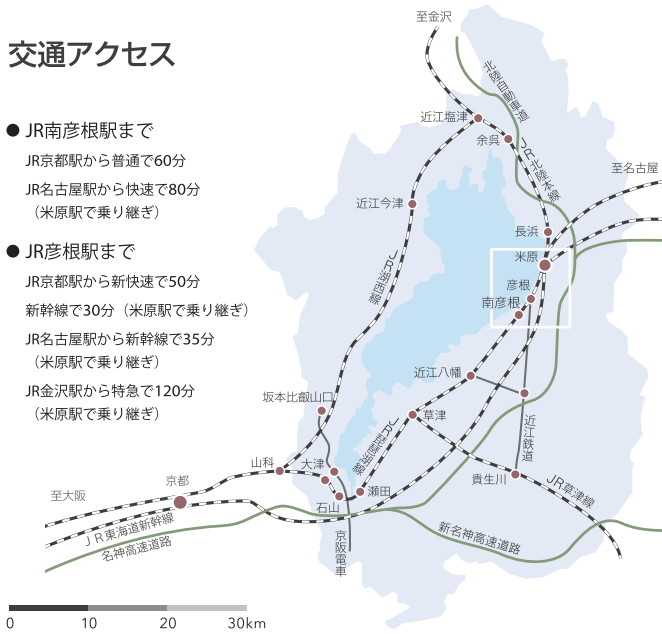
相談を希望する学部 <small>(希望がありましたら ○で囲んでください)</small>	・環境科学部 ・工学部 ・人間文化学部 ・人間看護学部					
申込者	貴社名 <div style="font-size: small; margin-top: 5px;">*パンフレット等貴社の事業内容がわかるものがありましたら添付してください。</div>					
	部署・役職					
	担当者氏名					
	連絡先	住所 〒				
		TEL — — FAX — —				
E-mail						
URL						
相談事項	相談の目的 <small>(○をつけてください)</small>	1. 製品を改良したい 2. 製品、製造における技術上のトラブルを解消したい 3. 新技術・ 新製品を開発したい 4. 機械・装置を改良したい 5. 新しい技術を身につけたい 6. 新技術に関する情報・資料がほしい 7. 製品の機能や性質を調べたい 8. その他()				
	相談内容 <small>※できるだけ具体的に記入してください。 お手元に相談内容を記載したものがありましたら、コピーを提出いただくだけで記入は不要です。</small>					
	相談内容キーワード	①	②	③		
	相談分野 <small>(○をつけてください)</small>	1. 農林 2. 食品 3. バイオ 4. 物質・エネルギー 5. 機械・制御・輸送 6. 金属材料・機能性物質 7. 建築 8. 生活・環境 9. 介護・看護関連 10. 情報関連 11. 分析・計測技術 12. メカトロニクス 13. その他()				
	希望する形態 <small>(○をつけてください)</small>	1. 専門知識・技術の提供 2. 分析・試験の依頼 3. 技術コンサルティング 4. 共同研究 5. 特許・ノウハウのライセンス 6. その他()				
面談を希望する教官 <small>(ありましたら記入ください)</small>	学部	学科				
相談紹介者	所属名	TEL — — FAX — —				
		役職	氏名			

技術相談受付窓口

公立大学法人滋賀県立大学 産学連携センター
 TEL: 0749-28-8604/8610
 FAX: 0749-28-8620

交通アクセス

- JR南彦根駅まで
JR京都駅から普通で60分
JR名古屋駅から快速で80分
(米原駅で乗り継ぎ)
- JR彦根駅まで
JR京都駅から新快速で50分
新幹線で30分(米原駅で乗り継ぎ)
JR名古屋駅から新幹線で35分
(米原駅で乗り継ぎ)
JR金沢駅から特急で120分
(米原駅で乗り継ぎ)



大学周辺マップ

- JR南彦根駅から大学まで
バスで15分(南彦根駅西口:南彦根県立大学線)
タクシーで10分
- JR彦根駅から大学まで
バスで25分(彦根駅:三津屋線)
タクシーで15分
- 名神彦根ICから大学まで
車で20分(6.5km)



公立大学法人滋賀県立大学産学連携センター

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
 TEL: 0749-28-8610 FAX: 0749-28-8620
 E-mail: sangaku@office.usp.ac.jp
 ホームページ: <https://www.usp.ac.jp/chiikisangaku/center/>